

やはり彼女が帰ってく  
るのは間違いなくまち  
がっている

マツキーガイア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いつもどおり比企谷八幡はボツチをやっていたある日  
学校に転校生がやって来る

い。  
あつ皆様こんにちははガイアです。暇潰しに書いたものなのでよかつたら読んで下さい。

因みにpixiv版では「やはり俺の過去はまちがっていた。きっと今も」でやって

ます。

h t t p s : / / w w w . p i x i v . n e t / n o v e l / s h o w . p h p ? : i  
d || 9 7 6 8 5 3 7

リメイク版もよろしくお願いします

h t t p s : / / w w w . p i x i v . n e t / n o v e l / s h o w . p h p ? : i  
d || 1 0 5 7 4 7 0 6

あつ！やる場合は週一投稿です

# 目次

1話：失った記憶	1
2話：まだ何も無い。	15
3話：顔と目	23
4話：小町は言った	31
5話：そしてある朝	40
6話：意味のない時間	50
7話：否定と肯定	55
8話：優しい女の子	64
9話：ただ一度も	72
10話：盗み聞き。	77
11話：闇Ⅱ光	87

12話：僕と俺……	97
13話：……時々メタいな	106
14話：リーラ・エルフエ	114
15話：違和感	123
16話：判決	135
最終回：君じゃなきやダメみたい	146
番外編：煩惱退散、煩惱退散んつつ	163
!!!!	
やはり彼女が帰ってくるのは間違ってる!! Re : make !!!	
Re : make !! 1話：間違えてる。	180

- 232 R e : m a k e !! 8 話 : ゲームと日常
- 225 R e : m a k e !! 7 話 : アヒル、お昼  
|  
217 琲
- R e : m a k e !! 6 話 : 了解と睡眠と珈
- 204 R e : m a k e !! 5 話 : 曰く |  
212
- 197 R e : m a k e !! 4 話 : 恐怖を感じて
- R e : m a k e !! 3 話 : 兎にも角にも  
あれ?  
|  
189
- 243 R e : m a k e !! 9 話 : 死スコン



## 1話：失った記憶

前にも言った事があると思うがやはり青春なんて嘘だ。

彼らリア充共が青春と言うものは決まって友達と言う信用のできない無価値な存在が付いている。

知っているだろうが俺に友達などいない

だが青春とやらは謳歌できている

人は一人でも生きてはいけるのだ

教室の端に座り本を読む

これも一つの青春だといえよう。

よしっ！これで君もリア充だ！

「ヒッキーおはよう!!」

そして青春は音も無く崩れ落ちる

ああ、いつもの事だ。

「なんだビッチ？」

「ビッチじゃないし！ヒッキーキモい！」

まあ今のは俺が悪かったな

「で？何の用だ？」

「あのね今日この教室に転校生が来るんだって！」

「へえ、でそれがどうした？」

「ヒツキーは気になつたりしないの？」

「どうせ俺との交流なんてないだろうし転校生が来る事自体どうでも良い」

「はあ、いつも通り捻くれてるね？」

「うっせー、通常運転だ。」

すると平塚先生が教室に入つて来た

「おい、そこうるさいぞー」

さつきまで話していた奴らが話を止める。

「よし、じゃあ男子には嬉しいお知らせだが今日からこの教室に転校生が来る」

するとまた教室がガヤガヤし始める

「うるさいぞー次喋つた者には私の『衝撃のファーストブリット』を食らってもらうから覚悟しろよ？」

その瞬間教室は静かになる。

うん、平塚先生って恐ろしい



みんな分かってているのだそれはどう言う事か  
先生プライベートでもこんななんだろうな  
だから独s……………

ザツ!!

何かが横を通った気がした

「すまん比企谷、手が滑った」

平塚先生がそう言う

俺はゆっくり顔を後ろに目線を向ける……………そこにはチョークが刺さっていた

絶対殺す気だったよねコレ?

「では、紹介しよう。入って来なさい。」

あ、こっちは無視な方向なんすね?

「はいー!」

元気な声で返事をして入って来たのは白髪 of 彫りの深いどう見ても外国人の女の子  
だった。

しかしこの娘どこかで……

ああ、確かハ○ウッド映画に出てた娘だ！

あの『リア充爆発するんです』は衝撃だったな

リア充共がどんどん爆発していくだけのストーリーでたしか彼女はリア充を憎む中学生役だったけ。

小町が好きで毎日のように観てたな。

「リーラ・エルフェですよろしくお願いします。」

器用な日本語でそう言う。

「みんな仲良くしてやってくれ。では次の時間は実習だ気になることが有ったら聞いてやってくれ。」

「素晴らしい平塚先生は出て行く。ん？なんかこつちを憎らしそうに見えるがどうしたんだ？」

そして、クラスみんながエルフェに飛びつき質問攻めをかける。

たしかに可愛いししかも外国のスターとなるとだれもが飛びつきたくなくなるだろうなすると、由比ヶ浜が興奮した様子でこつちに来る

「ヒッキー!!すごいよ!!有名人だよ!!握手してもらった!!」

「知らねーよってか、暑苦しいからこつち来んな。」

そう言うがちつとも離してくんない。

すると戸塚がこっちに来た

「八幡!!すごいね!有名人だよ!握手してもらったよ!」

「良かったな!!戸塚は今日も可愛いなあ!」

「私と言ってる事同じなのに反応が全然違う」

由比ヶ浜がそううなだれるが当たり前だろ!戸塚と由比ヶ浜どっちを取るって言われたら絶対戸塚だろ!!100人中100がそう答えるわ!!

そしてしばらくすると教室も静かになりエルフェも席に座ろうとする。

まあそれは普通だ。じゃないと授業出来ないもんな。

だが、言いたい事がある。……… なんて俺の隣なんだよ!

そう、は席を自由に選べたんだ。だが、他の奴らの誘いを断って俺の席に座っている。かなりの視線が俺に直撃している。とくに外野の。

「ああ、エルフェさん?何でここに座ってるすか?」

「え?それは私の自由じゃないですか?」

「でも俺みたいな目が死んだ魚みたいな奴の隣よりも葉山みたいなイケメンの隣の方がいいんじゃないすかね?」

「……… やっぱり変わってしまいましたね。ハチ君は……」

ハチ君？変わった？何を言ってるんだこいつは

「変わったって、俺たち今日会ったばかりじゃないっすか。」

「いいえ、あなたとは会ったことがあります」

え？

「あ、そういうえばハチ君とは結婚の約束もしましたね？」

彼女がいたずらっぽく舌をだして笑うと教室の時間が止まる。

……いや実際に止まった訳じゃないんだ。ただ時間が止まったように周りの人間たちが行動するのを辞めたのだ。

そして目が飛び出そうなほど目を開けてこっちを見ている。

「……ね、ねえ、リーラちゃん今のはどういう意味？」

皆が絶句していたところに一人の女子が質問してきた。勇気があるな異世界だったら職業勇者だな

「え？結婚しようって言うつもりで言ったのだけれども。分からなかった？」

いや、この娘は分かっていたんだよ。でも、普通こんな目が腐ってるような奴に言う言葉じゃねんだよそれは！

その子が「も、物好きだね〜」と言つて元の位置に戻つていった。いや物好きつてなんだよ!?分かつてたけど!!

「ハハハ、冗談よしてくれよ。ヒキタニだぜ?ありえねーつて」

するとみんなが笑い初めて「確かにな!びくつたぜ」とか言つてやがる

おい、お前!!ヒキタニだぜつてなんだよ!!俺が幸せになつちやダメなのか!?  
するとエルフェはぷーと頬を膨らませる。

「なんでそういう事言うんですか!!!」

エルフェは涙を流して叫ぶ

どうしたんだ?何で泣いてる?

『ハチ君、大きくなつたら私と結婚してよ!!約束だよ!!』

なっ!?

なんだ?今のは?

「がっ!？」

体がふらつき、頭に何か引つかかるような感覚が襲ってくる

頭が痛い。何故？

「え?ど、どうしたの!?!ハチk...!?!...し...保...」

意識がもうろうとしている。その証拠に彼女の声がうまく聞こえない。

何だっというんだ...俺は何かを忘れてる...ダメだ...

そこから俺は意識を手放した...

☆  
☆  
☆  
☆

暗い闇の中で彼女を感じていた……

『君はなんでそんなに違うの?』

隣に7歳くらいの女の子が居たことに気付く

「何が?」

『君はなんでそんなに違うの?』

何かが口から飛び出てくるように俺は答える

「……俺は違わないさ。ただみんなが俺を違うと認識しているだけ」

『じゃあ君は何で誰かのためにそんなに頑張れるの?』

「誰かに俺という存在を認識してほしから。」

口から次々と出てくる言葉に迷わされながら質問に答える  
また、質問が来る。

『じゃあなんで私を見てくれなかったの?』

「.....」

さつきまで喋っていた言葉が行き止る

『ねえ、なんで?なんでよ?』

彼女はどんどん焦るように言う。



俺は小さい声で言った

「いめん・・・・・・・・・・・・・・・・」

それは謝罪の言葉それだった。

「・・・・・・・・そっか」

そう言って彼女は目の前から消えていった。

☆ ☆ ☆ ☆

「う・・・・・・・・ん？・・・・・・・・・・・・・・・・」

目覚めると真つ白な情景が見えてくる

「・・・・・・・・・・・・・・・・知らない天井だ。」

「学校の保健室の天井です。」

ツツコミが入る。ベッドの隣に座つて本を読んでいる声の主を見つけた

「・・・・・・・・・・・・・・・・雪ノ下か？」

「誰ですか？雪ノ下つて？もしかして浮気？」

外れたクソツ、エルフェだった。

いや、その前に付き合つてもないんだから浮気もクソも無いだろ

「それより大丈夫なんですか？いきなり倒れてここまで運ぶの大変だったんですからね  
？」

「は？もしかして、お前ひとりで運んで来たのか？」

「まあ、教室の男子たちがほとんど運んでましたけど・・・」

顔を真つ赤にして言うエルフェ。うん可愛い

「それと、みんな心配してましたよ？『なんかあつたら俺たちに言え』つて。ハチ君みんなに好かれてるんですね。」

いや、んな訳あるか。ぜってーエルフェ狙いだろ。

「でも、ほんとに大丈夫なんですか？ 頭抱えてたし」

「……今は結構大丈夫だ、体も動かせるし痛みも感じない」

「そうですか……またあの時みたいなのがなければいいけど……」

「……あの時？」

「忘れたんですか？ 10年前、交通事故で頭を打って。退院後もよく頭が痛いとか言つて頭を抱えていたじゃないですか。」

「10年前？ 交通事故？ 何だそれは？ ……」

すると彼女は「……え？」と小さく声を出して驚く

「交通事故を知らない？ どういう事？ ……」

「どうした？」

「最近、交通事故にあいました？」

「え、あつたけど1年前学校登校中に……」

「まさか、その時にまた記憶が……」

またつてなんだよ？ つて言うか10年前に交通事故つてなんだよ……

「帰り、あなたの家に行つても良いですか？」

「は？ なんで？」

「小町ちゃんに用があります。」

「なんで小町知ってるんだ!？」

「そりゃあ知ってますよ。というか結構仲良かったですよ？ 私達。」

知らなかった……だから良くエルフェの映画を観てたんだ

## 2話：まだ何もない。

昼休み、普通の高校生は教室で『みんなと一緒に』とか言いながら食事を始めているころ

俺もいつものベストプレイスでしずかーに戸塚の部活動風景を見ながらに昼飯を食べようとベストプレイスに来ていたのだが……

「……遅かったですね？ハチ君」

エルフェさん……なぜお前がここに居る？

「どうしたんですか？早く食べないと昼休み終わっちゃいますよ？」

「その前に聞きたいこと山ほどあるのだが。まず何故ここを知っている？」

「ハチ君ならここが好きそうだなあ、って思いまして」

「マジかよ、女の感ってすげー」

「ほめても何も出ないですよ／＼／＼」

顔を赤く染めながらエルフェはそう言った。何？この子マジ萌えるんですけど。そ

して怖いな

そして俺は彼女から1mほど離れたところに腰を掛ける。するとエルフェは不服そうに睨んでくる

「……なんでそんなに離れてるんですか？」

「俺なんかがお前みたいなの美人の隣で飯を食つてたら、その……色々まずいだろ？」

「美人つて／＼／＼／＼……つて！何もまずくないですよ！さあここに座つてください!!」

そう言いながらエルフェは自分の隣をパンパンと叩く。いや待て俺に死ねと？

「いやそれはくあれでくこれが、それで無理っす。」

「無理な意味が分かりません!!さあ座つてください!!」

俺は諦めて「へい、へい」と言いながら渋々隣に座る。すると彼女は嬉しそうにニツ

コリと笑った

「でもこんな風に二人でご飯を食べるのも久しぶりですね。」

「いや、俺まだ思い出してないからな？二人で食べてたのかも知らんし……」

「話に合わせてください!!」

「無茶言うなよ!!」

どうでもいいことを話しながら昼を食べ終わるとエルフェが何かを思いついたように聞いてくる。

「そう言えばハチ君は部活とかやってるんですか？」

「ああ、やってるがなんで俺の部活が気になったんだ？」

「私日本の漫画が好きでして……だから漫画みたいな変な部活ってないのかなーって。」

ああ、そういうね感じねそんな漫画みたいなSOS団やらスケツト団みたいなかにも変な部活なんてありやせんよ……いや俺そんな変な部活に入ってたわ

「じゃあ、俺が入ってる部に来てみるか？」

「どんな部活なんです？」

「うーん、漫画に例えるとスケツト団的な感じかな？根本的には違うけど」

「なんですか!?!それ、ものすごく楽しそーなんですけど!?!」

「まあ依頼がなけりやほとんどボーっとしててるがな」

「絶対行きます!!絶対に!!」

ものすごく興奮してるエルフェを横目で見ながら弁当を片付けながら思った。

『ああ、日本のアニメってやっぱ人気あるんだなー』と

「早く放課後にならないかなー♪」

☆  
☆  
☆

放課後になるとエルフェは興奮した状態で俺の手を引き教室を出る

それを他の男子が見て「ツチ、リア充が・・・」と吐き捨てながら横目で見ている。

うん、死にたい

第一こんなリア充っぽい事は葉山あたりに任せればいいんだよ。なんで俺が……  
「早く場所を教えてください!!」

「早く言えばコイツ場所知らなかったな。じゃあなんで俺を引っぱっていったんだよ……」

「はあ……分かりましたよお嬢様……」

「早く!早く!」

子供か!!



しばらく階段を上り下りしていると教室の名札がシールだらけの部屋が現れる。

「ほうしぶ？ですか？」

「ああ、発音はあってるよ」

そう言い教室のドアを開ける

「うす。」

そこには教室の端で本を読んでいる雪ノ下がいた。

するとこっちに気が付いたように向き直し口を開く

「あら、遅刻ヶ谷くん遅かったじゃない？．．．ところでそのk「かああわああいいいいいい！！！！」えっ!？」

次の瞬間エルフェは俺の隣から教室の端の雪ノ下の胸元に瞬間移動していた。いや、可愛かったからと言って速すぎだろ

うん、雪ノ下さんはいつもは由比ヶ浜とだけ百合百合してんなあ

「ちよ、ちよつとはなして貰えるかしら？．．．．．比企谷君．．．．．」

助けてほしそーにこっちを見られても困る。ハッキリ言って無理だ残念だったな雪

ノ下そのまま百合百合してろ・・・

「ああもう!! ハチ君この娘、飼ってもいい!」

「駄目ですよ! 世話できないでしょう!?! とうかいやらしく聞こえるからやめろ!!」

「ハチ君のケチイイイイ!!」

ケチとかじゃねーよ。てか完全にキャラ崩壊始まつてるんですが!?

ガラッ

「ヤツハロー!! っってリーラちゃん!」

ドアの開く音とともに由比ヶ浜が手を振ってバカっぽい挨拶をしながら入ってくる。

「ヤツハロー?? 由比ヶ浜さん」

後、エルフェさんよそのバカっぽい挨拶は止めてください。あと、ハテナマーク入れるのも。

「とうか、由比ヶ浜さんも奉仕部だったんですか。ハチ君なんて言ってくれなかったの?」

「すまん由比ヶ浜、紹介し忘れてた。」

「ひどくない!?!」

由比ヶ浜はそう叫ぶ。すると雪ノ下が話に割り込んできた。

「由比ヶ浜さん、彼女は誰かしら？どこかで見たことがある顔なんだけれども」

「ああ、ゆきのんは知らなかったんだ。今日転校生来って話があったでしょう？」

「ええ、あったわね」

「この子が転校生のエルフェ・リーラちゃんだよ！」

「そうなの？でもどこかで見たことがあるような？」

「ああ、彼女ハリウッド女優だから」

そう言うエルフェは少し驚いた顔をする

「な・・・なんでそのことを知ってるんですか？」

「え？みんな知ってるよ」

「じゃあなんであんなに普通に接してこれたんでしょう？」

「まあ、うちの学校の生徒はみんな個性豊かだからね。その中にハリウッドスターが居てもおかしくないよ」

ハリウッドスターが普通ってそんなに個性豊かだっけうちの学校!?

「そ、そうなんですか・・・」

ちよつと困ってるじゃないっすかエルフェさん

「すごいですね!!日本って」

違うからねこの学校がおかしいだけだから

すると雪ノ下が止めに入る

「まあまあ、由比ヶ浜さんエルフェさんが困ってるじゃない。」

「そう? ごめんねリーラちゃん」

「大丈夫ですよ。由比ヶ浜さん結構重要な事聞きましたから」

「そうなの?」

「そうですよ! 有名人つて大変なんですからね! ストーカーとか! いたずら電話とか!」

それなりに苦勞してたんだなくって全部犯罪やん

「うへえ、ほんとに大変そうだね」

「今までは学校とかに普通に侵入者とかきちやつたりしてたんですけど。ここなら大丈夫そうです!」

それは日本でもたまにあるな。後、結構大丈夫じゃないかもね

### 3話：顔と目

部活が終わり雪ノ下が職員室にカギを届けに行くのを由比ヶ浜が追いかけていくところを見ながら

エルフェと帰路に着こうと玄関に向かう

靴入れの少し手前でエルフェが話し始める

「……………やっぱり良いですよねこう言うのって」

「……………どういうことだ？」

「私こういう日常にあこがれてたんです。いままで世界のあちこちに行つてたからロクに友達とか出来たことが無くて」

「そうか……………」

やっぱり女優つて大変なんだな、俺にも友達がいらないけど理由が天と地の差だ

「ええ、だから女優を辞めて色々あつてこつちに来ましたがやっぱり日本に来て正解でした。」

すると、エルフェはちらつとこつちを見て悪戯っぽく「ハチ君にも会えたし……」と言う。柄にもなく照れくさいな

「と、とりあえず今日は俺ん家に来んのか？」

「ええ、小町ちゃんにも会いたいですし……ちよつと用があるので……」

靴を履き替えながら言う

「俺の記憶がどうたらつて奴か……」

「ええ、そうです。では行きましようか。」

そう言つてエルフェは靴を履き替え帰路に着く

門に向かおうと足をそろえて歩き出すと門の前になんだか人だかりができていた

「なんだ？人だかりは」

俺はその人だかりに興味があっていたが、エルフェはその中の人を見るなり顔を青くする

「……………!! は、早く行きましよう!!ハチ君!!走つて!!」

「へ？」

エルフェは俺の手を持つと一気に走り出そうとする。

「ん？ちよつと待つて!!・・・やつと見つけたよハニー!!」

すると人だかりの中から金髪のイケメンが現れ俺たちの道をふさぐ。そしてエルフェの前に立った・・・いや待てハニー??

さつきまで騒いでいた人間たちは「え？ハニーってどういう意味だっけ?」「いや、さすがに勉強したでしょ」「あれ？あの娘って今日来た転校生?」と話し始める。

「さあ一緒にアメリカに帰って。そして結婚しよう」

へ？結婚?

「だからいやだつて言いましたよね？私は帰りませんし、貴方とも結婚しません」

いや、待てよ。いよいよマジで話が分からなくなつてきた

「すまんがちよつと待つてくれるか?」

俺が間に入る

「なんだ？庶民が俺に話しかけるとは身の程知らずにも程があるだろ?」

なんだこのイケメン？かつちーんとききましたよ?

もー切れちゃいました。ぶつつんします。

「いや、その定理だと少なくともお前は庶民ではない何か高貴な者だと言つてるように

聞こえるか？」

「お前、俺を知らないのか？」

「は？知る訳ねーだろお前みたいな典型的な駄目イケメン

こんながイケメンだというなら葉山の方が100倍マシだわ

「ハ、ハチ君！」

小さい声でエルフェは俺を呼ぶ

「なんだ？」

「この人は、俳優のローマン・ゴードンさん海外ではトップクラスのイケメン俳優って呼ばれてる人・・・ほら」

彼女はスマホを取り出し雑誌の記事を見せる

そこには「世界一のイケメン俳優ローマン・ゴードン」と書かれていた。

「はあ、こんなのがイケメンだとか世も末だな。」

「で？そのイケメン俳優が何の用だよ？」

「な〜に、我が愛しのハニーがこんな端の小国に引っ越しとは示しが付かないだろうと思ってるね。連れ返しに来たんだよ」

「バカかお前は、そんなんは彼女が決める事だろ？」

「何がバカだこの畜生。というかお前何故彼女と歩いている？貴様にそんな権利あると



は思えないが？」

「権利とか知るかよ、この世にそんなどうでもいい権利なんかあったら逆に引くわ」

「彼女は人類の宝だそんなの当たり前だろ」

「それはどこの世界の話だ？そんな権利があつたらエルフェは一生誰とも話せないし会えないじゃないか」

「話さなくて良いじゃないか！俺さえ居れば!!」

「……は？馬鹿なの？本当に。それは本気でエルフェを愛している奴のセリフか？」

彼女の権利を否定するか、

イケメン君はプルプル震えていて、隣ではエルフェが驚いた顔をしてこつちを見ている

「クソツ話にならんな！」

「はっ、同感だ……」

そう言つて彼は足早に帰っていく。

最後に「覚えてろよー」とか言つてそうだな

するとエルフェは目を見開いてこつちを眺めて言った

「ハチ君……」

「なんだ？」

「ありがとうございます。なんだか、安心しました。」

「安心？」

「やっぱり、ここは違うなって。自由じゃないですけど。」

そっか……私にも権利があるんだ……」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

それからしばらく、俺たちは比企谷家に向かっていた

さつきから隣でそわそわしているエルフェ、何だっただ？

するとエルフェはさつきのイケメン騒動について聞き始める

「いや、それにしてもさつきの八くんはかつこよかったですよ！どうやったらあんなにカッコよくなるんですか!？」

「いや、どうやったもこうやったもただ普通に本当の事を述べていただけだが……」

後、アイツ雑魚だったから楽勝だったよ

「はあ、あなたはホントに凄いですよ。」

「なんでだ？」

「それは……！！……ま、まあ、もう過ぎたことです。とりあえずさっさと行きましょう」

彼女は何かをはぐらかすように話を進めていく。

なんだか腑に落ちないが……彼女がそれでいいならもういいか

すると家が見えてきた。

「さあ着いたぞここが比企谷家だ」

俺はやる気がなさそーに言う

それを見てエルフェはニッコリ笑う

「やっぱりハチ君ですね♪」

「は？何が？」

「何でもないです♪さあ行きましょう！」

「はあ仕方ねーな」

そう言つて俺はドアを開ける

「ただいまー」

## 4話：小町は言った

「ただいまー」

ドアを開ける音とともに俺たち二人はそう言う。

玄関をくぐると俺にとってはいつも通りの空間が広がるしかしエルフェにはそうではなかった

隣の方ではエルフェが「久しぶりだなあ」とか「変わってないなあ」とか言っているのが聞こえる。

しばらくするとリビングから声が聞こえてきた。

「おかえりーお兄ちゃん、おねえ……あれ？」

気が抜けるような声の持ち主、我が愛しの妹、比企谷 小町だ

しばらくして小町の「ふあ!？」という奇鳴がきこえてきた

その瞬間、奥の方から急ぐ足音が聞こえてくる。

「お姉ちゃん?!?!」

走ってきた小町の目には少し涙が溢れていた

「ただいま小町ちゃん……………」

エルフエは静かに笑って小町を安心させるような声でただいまを言う  
すると小町はエルフエの顔を見るとエルフエに抱き着き泣き始めた

「おねえちやああああああん……………」

抱き着きながら泣く小町の頭を撫でながらエルフエは言う

「ごめんね寂しかったんだよね小町ちゃん。ごめんねなかなか帰ってこれなくて」

そんな二人を見ている俺はまるで離れ離れだった親子が再び出会ったようなそんな  
感覚に陥る。

その後10分ほど玄関ではしばらく小町の泣き声がずっと響いていた

しばらくして小町が落ち着いてきた

そして小町は目を真っ赤にして俺の方を見て言う

「……………お兄ちゃん、話さなきやいけないことがあるの……………」

「……………なんだ？」

小町は悲しい顔をしながら答える

「……………お兄ちゃんの記憶について……………」

「……………ああ、分かった」

俺は静かに答えるとリビングに行くとうと靴を脱ぎこわばった小町の頭を少しなでた  
後リビングに入る

真っ先に冷蔵庫に向かい飲みものを出す

「エルフェと小町はコーヒーでいいか？」

後から入ってきたエルフェと小町に飲み物を聞く

「うん、それでいいよ」

「お願いします。ハチ君」

「オーケー、コーヒーね。」

しばらくして自前のコーヒーメーカーでコーヒーを入れ二人の前に出す。俺は買置ききのマツカンを持ちソファアに座った。

ハッキリ言つてまだ聞く姿勢にはなれない。俺は俺自身を落ち着けるためにカンを開け少し飲む

「……ハチ君やつぱりそんなの飲んで。体に良くないですよ。」

「いいんだよ俺は、人生が苦いんだつたらコーヒーくらいは甘くてもいいだろ……」  
するとエルフェはため息を吐いて言う

「何言つてんですか？ハチ君もう人生の悪いところ全部見てきたみたいに言つて。まだまだ若いんですから」

お前は俺のお母さんかよ……………

そんなどうでもいいような話をしながら俺たちは小町と向き合う



☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「このことを話す前にお兄ちゃん一つ聞いてもいい？」

小町は俺の方を見て聞く

「え？ああ、いいが。何だ？」

俺がそう答えると小町は真剣な表情で聞く

「お兄ちゃんはさ、いつから自分がボツチになったと思ってる？」

「は？いつからって……小学生……いや、もっと前からだったと思うが？なんだ？もしかして俺の黒歴史あさりたいの？」

そんなの事されたら俺死んじゃうよ？

「ふざけないで小町はちゃんと聞いているの！……まあいいやごみいちゃんだし……」

いや、なんだよごみいちゃんってひどくない!?

あれ？エルフェがなんかこっち見てる？

「じゃあお姉ちゃんお兄ちゃんはボツチだった記憶がある？」

小町はエルフェにそう聞く

何当たり前の事を………

「な、無いよ。だつてハチ君、クラスの中心だったし」

は？何言つてんだコイツ？俺がクラスの中心？んな事無理に決まつてるだろ？

すると小町は俺を見て言う

「ほら、話が食い違つてるでしょ？」

「ああ、確かにな。だがそれは何の根拠にもならんぞ？もしかしたらエルフェが話に合せてるだけかも………まあ、それはないだろうけど」

そう言うとき小町は「やつぱりお兄ちゃんは捻<sup>レ</sup>れだなあ」と言いながらクローゼットを開ける。うるせえ！俺は捻<sup>レ</sup>れじゃない

「どこだったかな？これ？違う……これも……違う……あつた！これだ!!」

すると小町が8冊のアルバムを出す

「なんだこれ？2008年から2016？一昨年までのアルバム？」

「じゃあお兄ちゃんこのアルバムの中からお兄ちゃんがひとりで写ってる写真を全部見つけて！」

「……………はあ？」

「良いから！」

小町に無理やり渡された一つのアルバムを渡される

渡された限り探さない訳もいかなので「なんでそんな公開処刑みたいなことを……とぼやきながら渋々開く

「んなもんじゃない訳が……………あれ？誰だこいつ？」

そこには俺の隣に女の子が3人程映っていた。

一人はエルフェだと思うが、他の二人がわからない。短髪の子と黒髪のロング、どこかで見たような。

「あ！それ私とユーちゃんとニューちゃんじゃない!?懐かしいなあ」

ユー？ニュー？分からん

「私も良くリユーって呼ばれてたなあ。あつハチ君はそのままだったけど」

皆そんなネームセンスだったんだね。

「だがこんな奴覚えてないんだがなあ、俺そんなに記憶力悪かったっけ？」

すると小町が現れる

「それはこれから教えるから。で？あつた？無かつた？」

「あつ、忘れてたわもうちよつと待つてくれ。．．．．．」

俺はアルバムをめくりながら探していく。いくつかどう見ても盗撮だろ？と思うものもあつたがそれですら一つたりとも必ず俺の隣には人がいた。

「．．．は？．．．．．．．．．．なかつた？ありえないだろ？」

最後のアルバムの最後のページを見てからそうつぶやく。

ましてや何故か俺の盗撮らしき物まであつたのにそこにもなかつたのだ。

「どう？無かつたでしょ？」

隣でコーヒーを飲んでいた小町はそう聞く

「．．．．．．．．．．ああ、無い筈はないんだけどな」

「だよねえゝましてお兄ちゃんだよ？無いわけがないよね？さあどうしてか．．．．説明するね」

さつきまで泣いていた奴とは思えないほど張り切ったように小町は答える

「ここからはおふぎけなしで答えるね。単刀直入に言う実はお兄ちゃん  
は……………」

そう続けて小町は言った

「去年の事故で一回死んだんだ……………」

## 5話：そしてある朝

あれからどれくらいたっただろうか？

傷つくのが当たり前になつていた

俺は俺という存在を決して認めない

一つの道があつた。

俺はそれを進むしかない

何も知らずに

いや・・・・・・ただ一つだけわかるものがある

この先には一つだけ光開が存在する。

「……………うん？うん？」

俺は重たい目を覚ました。見渡すとそこは自室のようだ

「はあ、またか……………」

頭を支えながら立ち上がる。まだ少しくラクラクするがしばらくすれば元に戻るだろう

「……………てかなんで俺寝てるんだ？昨日寝た記憶がないが」

たしか俺は小町に何かを言われて……………ここからの記憶がない？

「まあいつものことだ……………うん」

そう自分に言い聞かせリビングに向かうため服を着替える

ガラッ

「ハチ君大丈夫ですか？」

「へッ?！」

パンツを脱ごうとした時エルフェが俺の部屋のドアを開られる

「あ、服ここに置いておきますからね。あと学校に行く前にシャワー浴びといたほうがいいですよ」

「ねえ……」

「あ、朝食ですか? だったらさつさと着替えて下に来てくださいね? 今日の朝食は私と小町ちゃんで作ったので味の保証はできますよ。」

「いや、違うお前さ……」

「もしかして私をご志望ですか? すみませんがそう言うのは大人になってからにしましょう? ね?！」

エルフェは顔を真っ赤にしてそう言う



「さて何故そうなる!? 違うよ俺今裸なんですけど!? 普通女子ってそう言うの見たら「きやー」とか言つて逃げるだろ!」

「? なぜ逃げなきやならないんですか? 未来の夫に向かつて」

「いや待て俺はまだお前の事を認めてないぞ!」

「知りませんし。これは強制ですよ。・・・後、別に私ハーレムでも良いですがその場合はユーちゃんニューちゃん連れてきてください。」

「俺はハーレム造れるほど人気じゃないし第一そのユーちゃんとニューちゃんとやらは会ったことすらない」

「じゃあ雪ノ下さんと由比ヶ浜さんで許して上げます」

「なんか一気にレベル高くなった気がする・・・」

「でもさっさと下に来てくださいね。ご飯冷めちゃいますから。」

「ああ、分かった。」

俺がそう言うのとエルフェは「さっさとしてくださいよ」と言いドアを閉め下に降りて行った

エルフェが下に降りたのを確認し。体を伸ばす

「ぐっ……つとさつさと着替えるか」

エルフエがもつて来た学校の制服に着替え、下に降りる

「あつ！遅いよお兄ちゃん!!」

そう小町が言う俺は「おはよ」とだけ言つて席に着く  
重たい瞼を開けて食卓を見る

「……なんつーか。すつげえー御馳走だな」

「でしょ！お姉ちゃんと一緒に朝ごはん作つてたら楽しくなっちゃつていっぱい作っちゃつた」

「いや限度つーもんがあるでしょ？なにこれ？優に100人前位作っちゃつたんじゃないの？」

すると

「流石に100人前は作つてないですよせいぜい50人前」

「いやそれでも多いからね!？」

目の前の大盛に摘まれた料理たちを見ながら叫んだ

50人前の料理を3人で平らげ学校の用意をする。腹がマジでギリギリだったぜ!!  
(・皿) || 3 フウ

すると前を通り過ぎようとした小町を俺は止める

「すまん小町ひとつ聞いても良いか？」

「何？お兄ちゃん？」

「お前昨日のこと何だが……」

そう昨日の「死んだ」の話だ

「そのことは昨日全部話したでしょ？」

「は？いや待て一個話されたも記憶にないのだが」

「いやいや冗談言わないでよ。お兄ちゃん「がんばったな」って頭をなでくれたじゃん」

いやいやいやそんな訳ないだって俺が愛しの小町の頭をなでたんだぞ？絶対覚えてるはず

だって俺は今までの人生で小町の頭を触った数を忘れた事は無いぞ!!

そんなことを考えてると小町が『キモツ』と言う感じの顔してたのでやめた

「でも、どういう事だ?.....」

「何いつてるか知らないけど。早く行かないとまずいんじゃない? 私達」

「は?」と思い時計を見ると8時20分になっていた。ホームルームまで後20分前、一言で言う『かゝなくりますい』。

「やばツ!? さっさと行くぞ!! 小町! エルフエ!!」

「はーい」

「ていうかお兄ちゃんを待ってたんだからね!」

俺たちは急いで鞆を持ち玄関を通り自転車を運ぶ

「お姉ちゃんは確か私の自転車あつたはずだからそれ使つて!!」

「うん、分かつた!!」

「やばい!!もう25分だ!!早く行くぞ!!」

「わかってるよっ!!もう、行ってきまーす」

そして俺は小町を後ろに乗せて発車する。

18分後

小町と別れやっとの思いで学校に着く。

「ふう〜ギリギリセーフっ」と

俺は背伸びして校舎に入ろうとする

「にしても速いですよもう少しで置いて行かれるところでした。」

「なんか言い方が、あざといなあ。お前一色か？」

「何言ってるんですか？一色って誰ですか？また誰か落としたんですか？」

「何言ってるやがる？俺は今まで落ちた事はあっても誰かを落としたことはねーよ。」

そう言いながら俺は靴箱に向かい靴を取る。

「キャッ!」

するとエルフェが靴箱の前で叫び声を出しながら座り込んだだろう音がした。

「ど、どうした!？」

そう言い向こうの靴箱を覗くと

「た、助けてくださいーい」

そこには無数のラブレターに埋められたエルフェがいた。まるでどつかの漫画みたいな感じで……

「ていうかあれ？この学校そんなに生徒いたか？というかどんな感じでこの手紙の山をその靴箱に詰めたんだ？」

深まる謎に対してエルフェはいう

「もうーそんな事考えるより助けてください!!このままじゃ手紙に殺されます!」

その後手紙の中からエルフェを助けた後ホントにギリギリで着席したとき

## 6話：意味のない時間

「……………なあ、エルフェよ」

昼休み。

俺は不機嫌そうに隣に座っている少女の名前を呼んだ。

「なんですか?」

少女も不機嫌そうに言う

「……………この状況は何だ?」

俺たちは昼飯を食べようといつも通りベストプライスへ来ていたのだが、

そこには、20人ばかりの人ばかりができていた。

その人だかりの視線はどう見ても俺たちに向いていた。

「ぐっ……どう見ても俺たちを見るよな?」

好奇の視線に弱い俺は少しひるんだ

するとエルフェは答える

「……………私は結構慣れっこですよ。だけど、こういう視線は初めてですね……………」



ハチ君はどうですか?」

「ボツチの俺に聞くなよ。ていうか俺は友達がいらないんだぜ?一緒にご飯とかも昨日エルフェと食べたのが高校中学に掛けて初めてだ。あ、自分で行って悲しくなってきた」

するとエルフェは「は、初めて……／＼／＼」と言っていたのを無視して手元にある大きめの弁当を口に掻き込んだ。

しばらく外野を無視して食べ続けると一人の男子がエルフェに近づいていた。

「ねえ、君がエルフェさんだよな?こつちに来て一緒に食べないか?皆で食べたほうがきつとおいしいよ?」

話しかけてきた男を見たところコイツ、葉山ほどではないがかなりのイケメンだ。しかもこの笑顔この笑顔でどれだけの女を落としてきたのか分からんが少なくとも100人は落としてきている顔だ。クツソイライラすることを思い出した。小学校の時………あ。ま、まあ俺の黒歴史は後にしてやっぱり嫌いだ(作者本心)

すると気に入らない顔でエルフェは言う

「ごめんささい、私先約居ますので」

「先約つてそこの男子でしょ？そんなさえない奴より俺たちと一緒に食べようよ。ね？」

おい、冴えないとはなんだ……………あながち間違つてないかもしれないと思つちやつたじゃねーか

「冴えない奴つて、貴方ハチ君の事を言つてるんですか？貴方自分を過大評価してるみたいですが。彼が貴方ごときに劣つているとでも？」

おい、今一瞬悪意を感じたぞ？

まあ、言わばナンパ相手にしてるわけだからそうなるのも当然と言えば当然だが……………すると相手は俺を軽くにらみつけた後、視線をエルフェに戻して言う

「ごときつて……………」

「ごときですよ。貴方の取柄は顔だけでしょう？そんな男なんてハチ君の足元にも及びませんよ。」

うん。今、目の前に雪ノ下が見えたのは俺だけか？

しかし、男はまだ諦めきれていないようだ。

「と、とにかく俺たちと一緒に……………」おい、そこのお前何してる？……………な、何だ？お前たちは……………」

黄色の法被を着た男たち10人程がイケメン野郎の目の前に現れる。

すると男たちはたちその法被をイケメン野郎に見せつける

その法被には大きく『八オリ命!!』と書いてあった。……なんかメタい奴らだな

「俺たちは “八オリ親衛隊” !!八幡を見守りオリヒロを助ける!!」

隊長らしき奴がそう言うてみるに堪えないポーズをとる、一見どうもオタクの集まりに見えるがどこか頼りがいのあるメンバーの集まりらしい。あとメタい

「なんだオリヒロって? ……ガッ!?」 KUBI TIME!!

「なんだ? 貴様オリヒロを知らないのか? まったく最近の若者は ……」 ギュ~~~~

「「「H A H A H A H A H A H A」」」 ギュ~~~~ ガクツ

うん、笑い方がウザイ。あと何気にそのイケメンの首を絞めるのは止めてもらえな  
いっすかね? そいつ死んでるし怖いんで

「はあくもう終わりか。つまらんなく次までに鍛えろよ? ったく」

男はイケメンの屍を地面に投げ捨てる。そして俺たちの方を向く

「失礼しましたっ!! どうぞお話の続きを続けてくださいっ!! 後、困った時は私たちを呼んでください!! いつでも駆け付けますから!!」

男たちはそう言って手元にあつた謎の腕時計で空中に穴を造りそこへ入って行った。

そして俺は思う。『作者よ。いくらスランプだからってふざけるのもたいがいにしてろよ……』と。

「さっきのは何だったんだ? ……」

「いいえ? 私たちは何も見ませんでした。見たとしても、ただの駄目イケメンだけです」

「え? でも………」

「私たちは何も見なかった。ね?」

「は、はい」

俺はそれからそのことに対して口を開く事は無かった。

## 7話：否定と肯定

放課後、昨日と同じように俺たちは奉仕部に向かっていた。

まだ日が落ちるのが遅いため太陽がまだ高い位置に居る。携帯の温度計を見るともう38度という猛熱。そんな日にクーラーも無い部室に行くのはただの拷問でしかないが行かなければそれはそれで地獄が始まる。うん、逃げるといふ選択肢がもう無いね！！

隣と一緒に歩いているエルフェも汗だくになっている。というか、昨日からエルフェと離れてる描写が無いというのが気になるがまあ、もういい加減諦めた

「日本の夏ってなんでこんなに蒸し暑いんですか……… なんか気持ち悪いです」  
「本当だよ。はあ、もう帰っていいかな？ 帰っていいかな？」

そう文句を言いながら地獄に向かう。  
「せんぱーい♪」

すると、あざとい声が聞こえてくる

俺は溜息を吐き今いる位置から少し横にずれた。

さっきの位置から風を感じた。

ズザザザザザザ

「ふあ!？」

いきなり出てきた陰にエルフェは驚く。

そこに横たわっていたのは少し茶髪がかった髪の見る限り一年生の女子。

「…………… はあ、なんだよ一色？」

そこにはこの総武高校生徒会長の「一色 いろは」のあわれもない姿があった

「あ、生徒会長さん」

エルフェはやつとの思いで彼女の事を思い出す。

「…………… せんぱーい、なんで避けるんですか？あ、こんにちはリーラ先輩。」

やつとの思いで立ち上がった一色がうなだれながらそう言う。

「避けるに決まってるだろ。第一考えてもみろお前のタツクルで俺が傷ついたらどうすんだ？後、暑苦しくてかなわん。」

「私の方はどうでもいいですかあ？」

「俺は自分が一番なの。」

プクーと頬を膨らませながら俺を睨む一色。

なんかゴミを見るような目で俺を見るエルフェ。

えつと…俺が悪いの？

「まあ、先輩はそういう人ですしね。」

諦め口調で一色がそう言う。やっぱ俺が悪いんだ？

「で？一色何の用だ？お前が俺に興味もなく会いに来るとは思えんのだが…。」

「ああ、忘れてました。平塚先生から伝言いただいているんです。じゃあ、伝えますね。」

コホン『比企谷、今日は部活は休部にしようと思う。今年最高温度であるクーラー無しの地獄に君のような引きこもりが耐えられるとは思えんしね。雪ノ下や由比ヶ浜からは私から言っておこう』だそうです。」

何気に似ていた一色の平塚先生の真似を見て少しびっくりしてから。すぐ正気を取り戻し話の内容を思い出す。

「あ、ああ分かった。OK」

「はい♪では私生徒会に戻るんで！あ、今度の生徒会の荷物運び手伝いお願いします！」

「ああ、分かった分かった」

「ふふ♪よろしくお願いしますね〜」

そう笑いながら一色は生徒会室へ戻っていった。うん、あざとい

するとエルフェが少し驚きながら呆気に捕らえていたのを思い出した。

「大丈夫か？」

「え、ええ。なんか、嵐みたいな人でしたね。」

「ああ、キャラ崩壊も甚だしいというか……いや何言っただ俺は？一色はいつもあんな感じだったろ？」

俺は自分にそう言い聞かせ。自分のポジションを再確認する。

そう言えば今日は休部なんだっけ。

「お前今日なにか用あるか？」

「え？無いですけど。」

「じゃあ、夕飯食べてくか？聞きたいこともあるし。」

分かっている。こんな言葉俺に似合うわけがない。だが、一つだけどうしても気になって仕方ないことがある。気にはなっているが否定されることを承知で聞いている……

「え？良いですよ。」

はい、昨日今日2日付き添ってただけで分かる。こいつ結構ガードが緩い。



「そのく良いのか？俺、男だぞ？普通こういう時って大体の返答は「無理」か、「死ね」だろ？お前大丈夫か？そのうち変な男に騙されたりして○○とかあったりしないよな？」  
 「死ねって…… 大丈夫ですよ。ハチ君ですもんむしろハチ君ならh……」  
 「やめんしやい!!」

エルフェが何か言いかけたところで俺は口を封じた。

これ以上○○○○やら○○○○やは出したくない!!それに俺のメンタルに傷が付く。  
 「と、とりあえずつ。今夜の買い出し行くから付いてくるか？」

「はい!!分かりました!!」

間も開けずに正定を言うエルフェに困惑しつつ校舎玄関に向かって歩み出した。

☆ ☆ ☆

買い物が終わりビニール袋を持ちながら。夜道を歩く。ここに居る人は俺とエルフェだけ。

「————でね。雪ノ下さんがそこで……」

エルフェのたわいもない話を軽くうなずきながら俺は聞く。  
ふと街灯の下で俺は足を止めた。

するとエルフェは俺の方を振り向く。 “これだけはどうしても聞かなければならぬい。” 俺は自分自身にそう言い聞かせる。

そして俺は口を開いて尋ねた。

「なあ、エルフェ…… お前は大丈夫なのか？」

言った言葉がうまく自分に突き刺さる

彼女は軽く驚いたように「え？」と呟いた。

「聞いたんだろ？俺の話。」

……俺の話、つまり今まで俺がやらかしてきた事の数々。文化祭、修学旅行などの俺の害悪。これは俺の中では間違ったことをしたつもりはないが他人からしてみればただの害悪ではない話。

「……………」

「一応言っておく。あの話は全部本当だ。」

俺は釘を刺す。

「……ハチ君はなんであんなことしたの？」

震える声で彼女は聞く。

今にも泣きそうな顔で彼女は自分の唇を噛む。

彼女の目から少し涙が零れ落ちる。

それでも俺は言わなくてはならない

「俺は

彼女は俺に背を向け走り出していった。

暗闇に光る雫が落ちて行く。

これは俺への罰だ。今までの報いだ。俺の中の何か壊れる。いやとつくづく壊れていったのか……  
気付くのが遅かったのか? ……  
いや

「……  
これでよかったんだ」

一言。俺はただ彼女の背中を見守った。

《そして彼らの関係はまた振出しに戻る。》

## 8話：優しい女の子

俺は優しい女の子が嫌いだ。

ほんの一言挨拶を交わせば気になるしメールが行き交えば心がざわつく電話なんかかかって来た日には着信履歴を見てつい頬が緩む。だが知っているそれが優しさだつてことを……

俺に優しい人は他の人にも優しくしてその事をつい忘れてしまいたいようになる。真実が残酷というのならきつと嘘は優しいのであろう。だから優しさは嘘だ

いつだって期待していつだって勘違いして……いつからか希望を持つのは止めた。訓練されたボッチは二度と同じ手に引っかけたりしない百戦錬磨の強者。

負けることに関しては俺が最強  
だから……

いつまでも優しい女の子は嫌いだ……

☆ ☆ ☆

“彼女の事はこれでよかつたんだ。これでもう誰も傷つく事は無い”

重い足取りを無理やり動かしながら。夜の道を行くスーパールのビニール袋にはいつの間にか穴が開いてそこから食材が出そうになっていたが気にせずただ下を向いてひたすら歩く。

人はとつづくに寝静まり俺は再スタートを切るため交差点の真ん中に居た。俺の隣を影法師がひたすらすれ違う。自分の輪郭さえもはつきりとしなくなっていく。俺は何ら変わりもんでも特別でもない……ここに居る人たちと同じいつかは消えていく……誰にも覚えてもらえないわけじゃない。覚えてもらえるのはこの中のごくわずかの人間……もしくはここには居ないかもしれない。死んだ人間はいつかは存在すらも忘れられる……

忘れられた人間は存在にすら無かつたことになる。人は忘れたことも忘れていく。

じゃあ、俺はこの先何を糧に生きて行けばいい？

ふと、道端で抗争が耳に入ってきた

「ねえ、君可愛いじゃん？俺と遊んでいかない？」

「や、やめてください！警察呼びますよっ!!」

金髪の男が茶髪の女の子を襲っている。男は20代前半くらいで女は10代後半の高校生のようだった。

だんだんその抗争はヒートアップしていつついに男が手を上げようとしている。

俺はそっぽを向こうとするが出来ない。頭の中ではあれをどうにかしようしか考え  
ていない。

“関係ない。関係ないんだ俺には……… だけど……… どうしても”

パシッ





するとさつき襲われていた女の子が近づいてきた。まだどこか怯えてるみたいだが大分落ち着いたみたいだ。

「……………そ、その大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。慣れてるから……………」

俺はそっけなく返す。こんないいこの娘だ罪悪感でも感じてるんだろうか。その必要もないのに。

彼女はハンカチを取り出し傷口を拭こうとしてくるが俺はそれを手で拒む。

「ちよつと、手をどけてください傷口にばい菌でも入ったら……………」

「必要ない……………」

ふらふらと立ち上がり帰路に着こうと落ちてたビニール袋と鞆を拾う。あれ？鞆のチャックが開いてる？

殴られたとき何かの拍子にチャックが開いたか？

中身を確認しようとチャックに手を付けた時……………

「……………はーくん？」

さっきの女の子が俺の生徒手帳を持ってこつちを見ていた。

彼女は呆気にとられた様子でこつちをしつかり視界にとらえていた。

「…………俺は「はーくん」なんて名前じゃない……………」

「忘れたの!? 私だよ! 霧雨 優香!!」

「知らん。俺にそんな名前の知り合いは居ない。人違いだ……………」

どこかで見えたことがある顔……………だがきつと他人の空似だ。

自分で言うのもなんだが目以外は顔は良いからな。

すると彼女が話しかけてきた。

「所でリユーちゃん元気にしてる?」

「だから、s…………え?」

それは確か昨日エルフェが言ってた。アイツのあだ名…………それを知ってるのは

「あれ? どうしたの?」

次は俺が呆気にとられている。すると霧雨が慌て始めた。

「あれ? はーくんどうしたの? もしかして傷に悪いばい菌が入ったの? ねえ大丈夫!?

はーくん!?! はーくん!?!」

あ、こいつあれだ天然だ。

「いや、大丈夫だ。その：： お前もしかしてエルフェが言ってた？」

「エルフェ？だれそれ？」

「いやリーラ・エルフェだろ？あいつ。だからエルフェ」

「そんな名前だったんだ!?!初めて知った!!」

友達の名前くらい覚えておこうぜ？な？

あっけらかんとした様子でそう言う霧雨にまじめにそう思った

「ところで霧雨はなんでこんなところに居るんだ？」

そう聞くと霧島は頬を膨らませる。いや、何で怒ってるの？

「もー、はーくん昔のあだ名で言つてよー」

「

それを聞いて瞬間俺は思った。  
“やっぱりか……”  
“と

ユーちゃんっ

## 9話：ただ一度も

「ふーん。そうなんだ〜」

俺は今なんやかんやあつてエルフェの事を霧雨に説明していた。彼女は聞き上手なのか話しやすい。関係ないこともどんどん話してしまいたいま夜の10時……うん、やヴァイ。特に小町のお説教が……

「まあ、そつちの事情はよく分かったよ。でもリユーちゃん帰つて来たなら教えてくれればいいのに……」

「いや、連絡方法が分かんないつぽかったからな」

「そつかくそう言えば教えてなかったしな〜ハー君と交換しとけばよかつたな。いつも一緒に居るから大丈夫だと思つてたからねえ」

「そもそも違う高校なのに大丈夫の何もない気がするんだが……」

「あ、そう言えば久しぶり〜」

そう返す霧雨に俺は戸惑いながら「ひ、久しぶりい？」と返す。一応言うぞ!!俺はこんな可愛い子とお知り合いになった記憶はない!!

すると霧雨は少し茶色がかつた髪を手でくるくると弄りながら俺の顔を覗いてきた……

「な、なんだよ？」

「うんうん♪ただなんかハーくん変わった気がしたんだけど……根本的などこは全然変わってないな〜って思ってたよ」

「は？意味が分からんのだが……それに前たちが知ってる俺とはほとんど変わってると思うが……」

「うんうん、全く変わってないよ。ハーくん毎回無茶するんだもん。そういう所全く変わってない。自分を切り捨ててでも他人を救っちゃうところ……」

首を横に振りながら霧雨は少し悲しそうに言う。

それに対しての俺の心境は少し照れくさくどこか悲しかった。何でこの娘はなんで俺の事をこんなに見ようとしてるんだ？他人をなんでそんな目で見れるんだ？

そんな事を考えていると霧雨は少し寂しそうにまた話し始めた。

「ハーくんってさ自分を過小評価しすぎなんだよ。何かと自分の方が他人より劣ってると思ってる。もつと自分を信じてあげなよ」

優しい声でそう語る霧雨の前に俺はただ立ち尽くしている。

自分を信じる……？俺にそれができるのか？

不安と安心が入り混じった心の中。ただひたすらに考える

「……いくつもの可能性を見てきて。いくつもの現実を見てきた……。その中で最悪な結果もたくさん見てきた。自分がどれだけ弱いかさえ感じた……。でも諦めなかつたから今がある。それがハーくん……。でしょ？」

「だ、だが!!俺じゃ彼女は守れない……。ならいつそ……。」

震えた声で俺はそう反発する。

空振った言葉の壁はそれを受け入れてくれない

「……だから、無責任にリユーちゃんを捨てるの……。？それが出来る人なの？はー君は」

その言葉は確信に迫っていた。胸が苦しい。

俺はそろそろ自分の道を走り出さねばならない。

すると霧雨はバッグを持って立ち上がった



「じゃあ、そろそろ時間も時間だから帰るね。」

「あ。ああ、そうだな。今日は… その… ありがとな…」

「うんうん、私も楽しかったよ!!特に最後なんか言ってみたかった言葉ランキングに入ってたやつだし!!」

うん、遊んでたのか?あの状況で?嘘やろ?心めっちゃ揺れまくってたのに最後の言葉で全部台無しだよ。

「——ああ、でも。君に会えてよかった。」

☆

☆

☆

——そして時間はいつも過ぎていく。

## 10話：盗み聞き。

次の日学校に朝早く着くとエルフェが俺の隣に座っていたがそつぽを向いて話そうともしてこなかった。まあ、俺が悪いんだけどなそう思いながら時間は一刻一刻と過ぎて行く。授業が進むにつれ居心地の悪さも薄れてきた。謝罪は今日は無理そうだと俺は判断し俺の方からも積極的には話しかけなかった。

昼休み。

いつも通りベストプライスへ行こうと弁当を持って教室を出ようとした時。生徒全員が教室のドアを覗いていることに気が付いた。覗くつもりもないから無視していると反対隣りに座っていた男子が俺に話しかけてきた

「おい、お前大丈夫なのかよ？」

「は？何が？」

珍しく話しかけてきたそいつに戸惑いながら俺がそう聞くとその男子生徒が廊下側を指さす。

「あれだよ。」

指の先にはエルフェが葉山に勧誘されている光景が目に入った。

ほう、葉山あいつナンパ癖なんてないと思つたが……まさかなあ。

それを見ていたトップカートスの人たちも戸惑っているように見える。由比ヶ浜がこつちをチラチラ見ている……根拠はないが《多分、大丈夫だろう》とアイコンタクトで伝える。いまいち良く分かつていないようだが……

「おい、屋上に行くつてよ！隠れて付いて行くか？」

そう俺に向かって言う男子生徒（名前は知らん）の言葉に耳を傾ける。それと同時に外で話していたエルフェと葉山が歩き出した。

「……じゃ、行つてみるか？」

俺はぶつきらぼうにそう答えたが内心好奇心であふれかえっていた。そして俺は手に持っていたマツカンを一気に飲み干す。

うん、めっちゃ甘いっ!!

「…… お前、絶対糖尿病で死ぬからな」

そう、それを見ていた男子生徒に真面目に言われた。分からなくもないのが辛いな。

☆☆☆

屋上

俺達男子一行は葉山の道順よりも近い道のりで屋上に先回りしていた。まあその近い道のりっていうのが2階から3階までペランダからよじ登ったりとかなり無茶な内容だったが先回りできたのだから文句は言えない。

「ふうく、だから言っただろう？こつちの方が早いつて？」

「いや、危険すぎるだろ!?俺以外の奴がけがしたらどうする？」

因みに5人で見に来ている。俺のボツチ感が最近薄くなってきていると思ってるのは俺だけだろうか？周りを見ると皿に先回りしたチームがいくつも見渡せたが。まあ良いか・・・見ないふり見ないふりつと

「じゃ、俺はあそこの裏に居るんで」

そう言つて俺たちは各自移動を開始する。俺は意外と高い位置にいて周りの人の場所を特定できるのだが。逆隣の名前も知らない男子生徒よ・・・手すりの下の部分

にぶら下がるのはいくら何でも危険すぎるんじゃないやありませんかね？ 一歩間違えれば死ですよありや。

そんな事に肝を冷やしながらから待っているとしばらくしてドアを開ける音が聞こえてきた。

来たか………遊び気分であってしまった分、緊張が凄いいことになっている。俺は手汗を拭きとりながら観察を続ける。

「………で？ 話って何ですか？」

エルフェが葉山にそう聞く。そう言ったエルフェの瞳は闇を持ったような……そんな暗い瞳をしていた。

「比企谷の話だ……彼の話は聞いているだろうか？」

「……あなたまでハチ君をバカにするんですか？」

殺気。こんな場所遠い場所にまで感じた濃い殺気。これはヤバいと多分ここに居る誰もがそう思っているに違いない。あ、やばい逆隣りの子がぶるぶる震え始めてる。このままじゃ落ちるぞ？

「違う。バカにしに来たわけじゃない。むしろ彼には感謝している……」

「……………感謝？」

まさか… アイツ言うつもりか？

止めろ、それじゃあ意味がなくなる。こんな人が多い場所（向こうには気付いてない）でそれを言うのはお前の信用にかかわる。駄目だ。絶対に。

「教えよう。彼が今までやって来たことの実を。」

それだけは止めろ。



パンツ!!

数分後、葉山の顔は真っ赤に膨れ上がっていた。周りの男子たちも驚いた様子で俺の方を見ている。視線がきついでするとエルフェは涙を流しながら

「……………最低」



そう呟いてエルフェは屋上から姿を消した。しばらく俺はそこから動けなかったが、しばらくして俺は葉山に近づいた。

真つ赤になった顔はどこか晴れ晴れとしていた。俺はそんな葉山の手を無言で手に取り立たせる。

「見たのか比企谷……」

「ああ……。だがなんでこんな事を……？これじゃお前の信頼は完璧に崩れるぞ？」

「分かつてる。それも承知の上だ……。こんな事になったのも俺の責任だ。俺が不甲斐ないから……」

それは否定もしないしする気もない。だがこいつの場合自分の事が精一杯になっていて他人をどうする気にはなれないはずだ。どうしてここまでの事をやったのかそれが一番の問題だ。

「実は彼女の耳にお前の噂が入ってきたのは俺のせいなんだ。」

「なんだと？」

俺が聞くと少し間を開けて話し始めた

「君は相模さんを覚えてるかい？」

「ああ、あの文化祭実行委員長だった奴だろ？それがどうした？」

「実はあの娘あれからお前の悪口を言ってるみたいだな…… お前に罵倒されて泣かされたつてお前に関わった人、全員に言い回ってるらしい。」

「…… まあ、知ってはいたがそこまで酷いとは思わなかった」

そこで葉山は話を切るが。やはり何かまだあるらしく言いづらそうにまた話し始める

「実は、エルフェさんも相模さんの話を聞いて後、その場に関わった俺に真偽を訪ねて来たんだが…… 俺がそれを正定してしまったんだ。」

そこら辺の話は俺も聞いていた（盗み聞きで）。まあ、あの立場からすると。仕方がないと思つたが。しかしそれで彼女が傷ついているとは思つてもみなかったそれが俺の罪だろう。

「すまない比企谷…… 全部俺のせいだ。」

葉山は頭を下げる。そこには今までのか輝かしい何かは見えなくなつていた。

「いや、全部が全部お前のせいじゃない。それに俺の件はどうにでもなるさ…… 今はとにかく自分の心配だけしてろ。」

俺は葉山にそう言う。お前の世話まで今はできないからな。自分で蒔いた種は自分で何とかしてくれなくては困る。

「比企谷…… すまない。ありがとう。」

葉山はそう言い屋上を出て行った。

ふと周りでこちらの事を観察していた奴らが現れる。あ、すっかり忘れてた。すると全員が興奮したようにこっちにやって来た

「お前スゲーな!!漫画の主人公みたいだったぜ!!」

男子生徒の一人がそう言い始めた。……は? (真心)

「比企谷俺はお前の事を間違えて解釈していたらしい……すまん……」

「葉山の話聞く限り凄い事してきたんだな。お前ホントに学生か?」

「お前の事ただのむかつくりア充野郎だと思ってたけど見直したぜ!!」

「噂とかあまり信じない派だけどやっぱりお前の場合はその噂のせいで苦労してたんだな。頑張ったな」

「ダークヒーローって奴だな?分かる!」

最初の男子生徒を中心に口々にそう言ってくる。ただいま、混乱中。すると一人足りないことに気が付いた。

「あ、〃逆隣りの名も知らない男子生徒〃どこに隠れてたんだっけ？」

「「「「「「「あ!?!」」」」」」」」

その後、〃逆隣りの名も知らない男子生徒〃と思われる遺体が丁度屋上の真下の花壇から発見された。

因みにその後彼は、賢明な治療によって無傷で帰ってきたと言う。

## 11話：闇＝光

リーラ・エルフエは迷っていた。

昼休み「葉山隼人」によつて真実を知つた。彼が自分を犠牲にしてまで誰かを守つていたことも。彼がそれを行う事によつて多くの人々が救われていたことも……

彼女にとつて彼「比企谷八幡」は昔から特別な存在だつた。もちろん今もだ。

しかしそんな存在の彼を自分はあるうことか否定してしまつたのだ……

その真実は彼女に重くのしかかつていた。

「彼にも事情があつただらうに……何も聞かないで……ハハ、私最低だ……」

彼女は小さく呟く。

そのつぶやきは誰にも届かない。届いたとしてもきつとそこに自分の求める答えはない。

『きつと……私は彼の隣に居ちやダメなんだ。』

自分に言い聞かせる。答えなど出やしない。むしろそれが答えかもしれない。彼に

とつても彼女にとつても…

いく度も夢見た彼との幸せ…。それはきつと幻想なのだろう。

そんな未来は絶対に来ない…。来てはいけない…

「もう…。私…。駄目かな？…」

諦めた目で彼女は近くにあつたスマホを手に取り。ある人物に連絡を取る

相手は先日八幡に言い負かされた相手…。『ローマン・ゴードン』だった。

☆☆☆

『ハリウッド俳優ローマン・ゴードンさんと女優リーラ・エルフェさんがご婚約を発表しました!!』

朝、比企谷八幡は朝ごはんを食べている時。たまたま見たニュース番組に呆気に取ら

れていた。

通常の俳優の結婚予告などだったらあまり気にしていなかっただろう。しかし、テレビに映っていたのは学校のクラスメイトであり。自分で婚約者だと名乗った美少女リーラ・エルフェだった。しかも一緒に写っていた男は彼女が嫌っていたイケメン野郎。

「ねえ？これどういう事なの？お兄ちゃん!」

妹の小町が素晴らしいはじめる

かなり焦っている様子だ

「知るか。」

「ねえ、もしかしてお兄ちゃんお義姉ちゃんと何かあったの？喧嘩とか……」

小町はこちらをじつと睨め付けながら見つめる

「………何かあったんだね……」

小町がそう言う。

「さっさと学校行こうぜ？時間がヤバいだろ？」

俺は話をそらそうする

「お兄ちゃん!!!!!!」

小町がかつて今までないほどの大声で怒鳴った。今までないほどに怒っている。それを感じさせるような姿勢でこちらをしっかりと見定めている。

「お兄ちゃんはこれでいいの?このまま誰かもしれないような男とお姉ちゃんを結婚させて。私は嫌だよ」

「だ、だがな、これはエルフェ自身で決めた事なんだろう?俺たちが口を出すのもな「甘つたれてんじゃない!!!」」

彼女は本気で怒っている。今までのように茶化したりとかじゃない。本気だ。

答えは決められた。ここで俺が出て言い答えはただ一つ。

「..... はあ、わかった。白状するよ.....」

俺は小町にあの事を話した。



——で？まだ謝れてないと」  
腕を組みながら小町はそう言う。うん、うちの妹は怒らせたら本気で怖い。それがはつきりとわかった気がした。

因みに俺は正座させられている。

「あ、ああ、そろそろ時間ヤバいんじゃないか？」

「そんなのどうでもいいよ!!……………で？これからどうするの？」

ふと小町が聞いてくる

「どうするって？」

「決まってるじゃん。お姉ちゃんだよ」

「……………どうもできねえよ。アイツが自分で決めてしたことだ……………」

俺はそう言う……………あれ？震えてる？俺が？

「お兄ちゃん……」

「分かったらさっさと支度しろ……」

そう言う俺は鞆を持って自転車に向かって行った。

体に怠さを感じられる。苛立ちも感じられる。狂気も感じられる

ガシャーン!!

手元から力を失い鞆が地面に落ちたと同時に自転車が倒れる。

「……何だよ?……」

落とした鞆を拾おうと手を伸ばすが力が出ないため鞆が握れない。

「なんなんだよ!!! 本当につ!!!」

一人でただこの苛立ちを声に出す。はたから見るとただのヤバい人だ。しかしそれでも俺は続ける。

「お前は何がしたい!!?俺に何をさせたい!!?」

何度も何度も鞆に手を伸ばす。だが鞆を握りしめることが出来ない。苛立ちだけが募っていく。

「クソツ!!クソツ!!:.:.」

ぬぐい切れない記憶。短い間だったがそれは決して消えない記憶。消したくない記憶。

「クソツ!!:.:.:.」

自覚は無かった。自覚する勇氣もなかった

「クソツ!!:.:.」

これはきつと恋などではないかもしれない。

「クソツ!」

だが、どうしても知りたくなってきた。

「クソッ」

この気持ちは嘘であるかどうかを。

「くそ・・・」

きつと、俺は・・・彼女に惹かれたんだと思う。

彼女の純粹さに。

『あ、そういうえばハチ君とは結婚の約束もしましたよね?』

真面目さに。

『これ結構重要なんですからね!』

優しさに。

『ごめんね。寂しかったんだよね。』

強さに。

『彼が貴方ごときに劣っている？』

昔俺は本物が欲しいと言ったことがある。

この気持ちは偽物だ。彼女もきつと昔の“比企谷八幡”を俺に重ね合わせただけの偽物……

偽物は本物にはなれない……だが偽物が本物に負ける道理があるのか？それは否<sup>いな</sup>だ  
偽物は本物より本物らしく有る事は出来る

☆☆☆

「お待たせくおに……ちゃん？……」

小町が玄関から出てきたときそこに比企谷八幡の姿は無かった。あつたのは落ちた鞆と倒れた自転車だけ。

「ただ何故か小町は安心していた。」

「はあ、……良かったね。お姉ちゃん……でも、お兄ちゃん可愛い妹を置いてくなんてポイント低いからね？」

## 12話：僕と俺：

リーラ・エルフェは記者会見に出ていた。

内容はもちろん結婚報告だ。

好きでもないむしろ嫌いな男と一緒に笑いながらカメラの前でマスコミたちにあることない事喋りながら媚びを売る。自分でやって吐き気がする。

「付き合って何年くらいですか？」

「半年ですかね」

マスコミの質問にローマンはそう答えるがもちろん嘘だ。言い寄られたことがあっても付き合ったことは一度もない。はつきり言って外見だけの嘘だらけなこのイケメンは嫌いだ

じゃあ、なぜこんな男と結婚しなければならないのか、なぜ自分でこの男を選んでしまったのか

理由は彼女の家にあつた。

元々彼女の家は裕福な家庭ではなかった。それに伴って彼女の事を道具としか見ない連中が多すぎたのだ。

もちろんハリウッド女優の経歴も彼女の意志ではない。家の人が勝手に応募して勝手に仕事を受けた結果である。

はつきり言つてエルフェ家にとつて彼女「リーラ・エルフェ」は金の生る木なのだ……だ。

この結婚も家の人間たちが自分の欲望を再現させるための茶番に過ぎない。

ローマン・ゴードンはイケメンと言われてるだけあつてもかなり儲けている。それにこの男は大の女好きだ。

彼らはこれに付け込んで、ゴードンと娘を結婚させ自分たちが使える金を造ろうという魂胆だつた。

(なんでこうなつちやつたんだろう……)

エルフェはこつちの気も知らず話しかけてくる記者たちに苛立ちを覚える。

昔からこういう連中は嫌いだったが、なかつた好感度がさらに急下降していくのが感じられた。

(学校とかどうなるんだろう……奉仕部まだ続けたかつたな……)

——分かつている。

この男と結婚したらもうこの人生で心から笑つて過ごせるような幸せというものは感じる事はないと。



この男とは一緒にご飯を食べても、一緒に映画を見ても、一緒にお買い物に行っても……きつと楽しくない

それを裏付けるようにいやらしい目でこつちをチラチラ見てくる。

(その汚らしい目でこつちを見ないでよ……)

ローマンにとってエルフェは買ったばかりの愛玩具に過ぎないのだ。それは決して愛など無い。この結婚に愛なんてものは決して絶対に無い

## ☆☆☆

「はあ、……はあ、……はあ……」

比企谷八幡はひたすら走っていたどこに行くわけでもなく走っている。

息詰まりがして立ち止まった。

「はあ、はあ……何処だ……ここは？」

見渡すと、そこはどこか見たことがあるような景色……

いや、確かに俺自身は来たことが無い場所だ  
すると、話し声が聞こえてくる。

『ハチ君、大きくなったら私と結婚してよ!!約束だよ!!』

『僕なんかで良いの?』

『ハチ君だから良いんだよ。それに

私には貴方しかないから。』

確かにまだ幼いがエルフェの声だ。

忘れていた記憶が蘇った？……いや違うな。

— これは俺じゃない。

— 俺は、僕ではない。

— 僕も俺じゃない。

その瞬間胸の奥から声が聞こえてきた気がした。

— 良く分かったね？

俺の声のようだが、雰囲気が違う。好青年のような甘い声をしている。

それが問題じゃないこいつはきつと……

「ああ、こっちは初めましてだな。比企谷八幡」

【そうだねーやあ、僕♪】

挨拶を適当にかわす俺達。この仮説は正しかったか……

俺が立てた仮説、それは俺自身が二重人格という可能性。

俺も最初は否定したが。よく考えたらおかしい。

すべての記憶がまるで人格が変わったように入れ替わったのだ。そんな事普通はあり得ない。

だから考え方を変えた俺が俺である可能性を

「……じゃあ、何か聞きたいことでもあるのかい？」

あつげらんかとそう言う自分に驚きながら質問を試みることにした

「じゃあ、まず一つここでお前が出てきたことは俺の人格は消えるのか？」

「さあ、それは分からない。でも、どっちかが消える場合俺じゃなく僕の方が消えるだろうね」

「……何故そう思う？」

「実は、僕ここから動けないんだよ。」

「つまり俺と入れ替わることが出来ないの？」

「うん、そう。詰まるところ俺が消えちゃったら。僕はじつとこの体の中から動けなく

なる。うん、植物人間の完成だね♪」

何気に怖い事を楽しそうに言う。

「わかった。今の所俺が消えることは無いんだな？」

【そだね♪】

こいつ自分が消えるかもしれないというのになんか楽しそうだな。

【あつ、あと君の心の声は僕に直で届いてるからね♪】

「じゃ、喋るときは心の中でもいいと？」

【うん、そう!!】

俺に向かって指を立てながらそう言った。と思う。

【だけど、お兄ちゃん感心しないな♪】

「おい、いつからお前はお兄ちゃんになったんだよ？」

【うん？だって、この体の元の持ち主僕だもん♪君は精神年齢は僕より高いけど実年齢ハッキリ言つて1歳だからね？】

「1歳!?!…つまりあの事故の時俺が生まれたと？」

【そゆうこと。まあいいやでも、そろそろ不味いんじゃない？リユーちゃん】

「つて！そうだ!!行かないと!!…つてどこに？」

【まったく・・・何も考えずに出るからそうなるんだよ・・・僕が言ったとおりに道を進んで】

☆☆☆

———で？ここ何処だよ？———

言う通り進んだ先にはでっかいマンションが立っていた。

【うん、此処は八オリ親衛隊アース234支部だ】

なんかアースとか言ったけどナニソレオイシイノ？

【とりあえず入れればいいよ。君は八幡だから歓迎されるよ。僕はHACHIMANだから追い出されちゃうけどね。】

え？ちよつと発音違ったような

【とにかく入れ。アイツがきつと助けてくれるから。きつと】

【そいつは頼りになるのか？】

【うん、君も知ってるだろう？】

いまなんかニヤツと笑った気がしたが。少し貯めてから話始める

「ニューちゃんこの三番隊長なんだ。」

なんか寒気がした。

## 13話：・・・時々メタいな

「会場のみなさま!!!今回はスペシャルゲストに来ていただいています!!」

ステージの上で司会らしき人が大声でそう言う。

目の前には30000人近くの人込みがステージを見つめていた。

「比企谷八幡様でーす!!」

煙とともに俺は姿を現す。

一つだけ聞きたい・・・何故こうなった？

俺は中の僕の言う通りに進んだだけなのにあれよあれよと言う内にステージに半強制的に立たされていた。

なんだよ、玄関前に立ったただけなのに警備員に止められてそのままずるずる引きずられるとかって。

しかもこのビル結構でかいんだよ巨大ホール、コンビニエンスストア、社員の住居ス



ペース付きつて。馬鹿げてる・・・

「はい、こんにちは」

「え、あ、ハイ、こんにちは。」

司会の軽い挨拶に戸惑いながら挨拶を返した。

その瞬間凄い歓声がホール内に響き渡る。いや、オカシイでしょ？なんで挨拶しただけなのに歓声が来るん？

「すごい人気ですねえ、他の人だと此処までなることないのに」

「え？・・・そうなんですか？」

そう言われると悪い気がしないが・・・今俺、急いでるんですが・・・

「そう言えばここには何の用で？」

司会は俺に質問をする。

「え？ああ、・・・ちよつと知人から助けてほしいければここに来いと言われて・・・」

俺はそう言う。

すると司会の笑っていた顔は少し悲しそうに落ち込む。

「すみません。それは無理ですね・・・」

「・・・え？」

「私たちの方にも規則というものがありません・・・私たちは物語に直接的に干渉してはいけませんよ。」

マジか・・・徒労だったか。

「すみません。私たち八オリ親衛隊の創設者であられるマツキーマンさんがその場しのぎで作った結社だけあって結構そういう規則が厳しいんです。」

うん、メタいなあ。

「私たちの方にあなたのストーリーのキーになる存在が居れば別だったんですが。落ち込んだようにチラチラこちらに目を向ける司会者。」

あ〜れ〜？

これはフラグかな？フラグかな？ああ、（察し）フラグだね♪

「そう言えば三番隊の隊長が俺の幼馴染だって聞いてきたんですが・・・」

「よし!!三番隊に連れて行って差し上げろう!!!」

その後また引きずりまわされた。

☆☆☆

—— 疲れた。

作者もそこで活躍する俺も。(魂抜けてるヲ)

30分引きずられ続けるとか・・・

「いっくです。」

着いたようだ。質素な扉に3番隊と書かれている。

すると「隊長とはどんなご関係なのでか？」とここまで案内してくれた男の隊員が聞いてきたが、俺にわかる訳がない。とりあえず幼馴染と言った。てかこの人三番隊のメンバーだったのか・・・

まあ、そんなことは置いておいてドアに手を掛ける

「あー、ちよつと!!!!」

すると隊員が叫ぶ。

何なのだろう？

「敵襲だあ!!!やれい!!」

へ？

大勢の屈強な男たちが俺に向かって殴りかかってきた。

・・・敵？敵なの？俺？

「ちよつと待ちな。」

聞き覚えのある声が聞こえる。

いや、正確には俺は知らない。多分僕が知っているだけだろう。

多分こいつは・・・

「久しぶりだな・・・ハチ。」

スラっとしたたたずまいでこちらをニヤリと軽く笑いながら見つめる美少女。いや、もう美女と言つていいレベルの女が立っていた。

【この娘がニューちゃんだよ】

さつきまでだんまりだった僕が喋った。てかお前の幼馴染何かとレベル高いよな。そう思っている例のニューちゃんの目がいきなり鋭くなる

「・・・お前・・・私知ってるハチじゃないな？」  
何で分かったん？

☆☆☆

「ほう・・・確かにアイツは昔からトラブルに巻き込まれやすい体質だったが・・・二重人格のお前も満更でもないらしいな」

あれからしばらくして俺は事情を聴かされていた。

筋肉質の男女が俺を囲んでいる。怖いよ。

余談だがあれから俺は彼女の事を姉御と呼ぶことにした。・・・理由は・・・聞

かないでくれ……

「それで、私たちに協力を頼みたいと？」

「ああ、そうだ……強制はしない……というか出来ない。もしそうなった場合は俺が一人で突っ込む」

俺がそう言うのと姉御はフツと笑う。

「お前さんの覚悟は理解した。……曲がりなりにも幼馴染だ協力しよう。」

姉御はそこまで言った後「だが」と付け加える

「彼女を助けるのはお前自身だぞ。私達は協力をするだけストーリーのキーキャラとして働いただけだ」

俺はその言葉に相槌を打つ。

この場合ではその言葉はどれだけ報われるか分かったものではない。

「……で？何時出発予定だ？」

「今すぐだ。今すぐでなくては意味がない。」

俺がそう答えると姉御は時間を見る。午前11時。煽れを確認すると姉御は言う。

「11時30分出発だ。」

「いや、今すぐd……」

「残念だがそれは無理だ。私たちはともかくお前は少し休憩を取った方がいい。働き過

ぎだ。」

そう言えば今朝から走ってばかりだったなロクな休憩も取ってなかった。

「・・・ああ、分かった」

「よろしい。ではいったん解散」

姉御がそう言うのと周りのメンバーたちがそれぞれに散っていく。すると姉御がこっちに来る

「そう言えばお前には自己紹介してなかったな私は 万木<sup>ゆるぎ</sup> 和子<sup>かずこ</sup> よろしく。」

あだ名なはずのニューの字が一つも無かったことに驚いた。

## 14話：リーラ・エルフエ

——夢を見たことがある。

私の前には何も無い、皆んな消えちやった。

私に幸せになる権利なんか無い。だって：私は自分を売ったんだから

——光がある。

自分だけしか見えない苦渋の光が。

それは自分にはあまりにも遠い。

遠すぎて輪郭さえも分からない。

——屍しかない。

最後は死骸のみ。

自分も他者も最後は死骸。

私は私として生きる事は許されない。許してくれない



私は私じゃない

私の中で彼は生き

私自身が彼との距離を放す

彼を愛する事はない。

なかには愛をも私を放す

ただ彼を愛したかっただけなのに

私の全てを奪いたいものが私を奪う

操り操られそれでも終わらない

理由は無くただの贋作は真作とはならず

人の闇はこの世で最も深く

形などは光が無くてはなにも意味は無い

できそこないの夢など誰にも耳にされない

はるの風など感じない。感じれない

無くなったものは数えきれない。

いくつものルートは確立した。私のせいでこのルートのみが行方不明

これもあれもすべて私のせい。

彼の物語に私は居なかつた。

居なくてよかつた。

居てしまったこと自体が問題。

私は作られた贋作

彼の物語は順調だつた。

彼の物語を直すために私は静かに退散するとしよう。それが彼にとつてもわたしにとつての一番の幸せ。

だけど・・・・・・・・

それでも・・・・・・・・

最後くらいは  
・  
・  
・  
・  
・

彼に……比企谷八幡愛する彼に会えたらいいな……

☆☆☆

「ここで少し待っててくれないか？」

ローマンが突然そう言った。

あれから一時間が過ぎ。私たちは近くのホテルに足を運んでいた。

ロビーでチェックインを済ませ近くで開いていた席に腰を下ろし荷物を運んでいた時の事だ。

「……どうしたんですか？」

興味はないが気晴らしに聞いてみる。

すると親指を立てて後ろに指を向る。………女か。

「じゃあ、行ってくる。」

そう言うと彼はナンパに向かった。

その行動にイラつきを覚えたが……まあ、何を言っても無意味だろう。諦めよう。

「……はあ……ハチ君ちゃんと学校行ってるかな……」

その時、息抜きに呟いたその言葉に私は違和感を覚えた。

『あれ？わたし何考えてるんだろう？……もう諦めたはずなのに……』  
身勝手すぎる要望に自分でも吐き気がする。

「……はあ……コーヒーでも買って頭冷やそ……」

ふと近くにあった自販機に向かう。

どうやらコーヒーメーカー特有の自動販売機だったらしい中にはコーヒー系の物しか入ってない

「どれがいいかな……」

あれ？これは……」

自販機のラインナップを見ると一つの黄色と黒の蛍光色で覆われているパッケージが目に入る。

「マックスコーヒー」

それは彼が好んで良く飲んでいた物だった。

そう言えばすぐく甘いつて言つてたけど一度も飲んだことないな。

「……一回くらいは買つてみようかな」

私は少し迷いながら言う

これは私の周りでははつきり言つてあまり評判は良くない。けれど興味はあつた何せハチ君の好きな飲み物だ。

少しは彼の気持ちを知れるかと思つて……まあ結果勇気がでなかつたけどでも、少なくとも今だったら飲める気がする。

私は戸惑いながら財布から120円取り出し自販機の入金口に入れ。

すこし高い位置にあるボタンにすこし背を伸ばしながら押す。

するとガタッと甲高い音がした。下の取り出し口から中から一つ取り出すといつも彼が持ってたやつと同じ柄・・・ちよつとした安心感がそこにはあった

パシユツ

開けた瞬間その辺に甘い香りが充満していく。

普通のコーヒーとは断然甘みが違う。普通なら吐き気ももよおすほど強烈な甘い香りなのに・・・何故か心地いい。

そして私は一口それを口に含む。

甘かった。

私にはあまりにも甘すぎる。

『人生が苦いのならコーヒーくらいは甘くてもいいだろ・・・』

そしてふと、彼の言葉を思い出す。

愛しいほど愛していたはずの彼の言葉を・・・

その瞬間、静かに瞼の奥から涙が一つ零れた気がした



## 15話：違和感

「良い買い物だったよ。」

ホテルの裏路地。

ローマン・ゴードンは向かい合っている執事姿の男にそう言った。

執事姿の男の足元には大量の金が山のように積んでいる。

「お気に召しましたか。あんな物でも」

「ツフ・・・ああ、かなりな・・・にしても自分の娘を金で売るとは・・・まさに外道だな。だが面白い。」

すると執事はムツとした表情になって言った

「口をお控えください。それは私たちに対しての屈辱です。」

そう言ったその姿が気に入らなかつたのかローマンは不愉快な顔を示す。

「ふんっ・・・しかし、たかが執事がその家の長女を物扱いとは・・・」

「なにを仰いますか。私達にとつてあれはただの商品です。まあ、商品がお客様に届く前に傷ついてしまつては困りますからね。それなりの扱いは保証はしてはいましたが

ね。」

執事は何食わぬ顔でそう言い放つ。

「……はあ、まあいいだろう。それはそつちの事情だ俺には何ら関係ないし。それに巻き込まれる道理もない。俺は俺でこれからの人生を今までどうり楽しんでいくさ。」

たまに女でもつまみ食いしてな……フフフフ……」

「はい、そうですか。では私はこれで……」

「ああ……叔母さまよろしく言つといてくれ」

そう言われると執事はローマンにお辞儀をして下に転がっていた札束を鞆に突っ込みその場を離れていく。

すると執事は「あ、」と呟きローマンに向きなおす

「そうだ、これからの援助お願いしますよ。」

ふと、執事が言った言葉でちよつとびくつとしたローマンだが

思い出し何事もなく軽く返す。

「はいはい、分かつてるよ毎年200万ドルだっけ？」

「はい。お願いしますよ」

そう言うのと執事は次こそ帰っていった。

空に目を向けるともう暗闇が周り一帯を包んでいた。

「8時か……」

ローマンはそう呟いて車へと向かって行った

☆☆☆

その日の夜。

ローマンはホテルへ帰ってきていなかった。

多分其処ら辺で遊びまわっているのだろうとエルフェは考えていた。つくづく最低な人間だと思う。

いや、それは私も同じか……

「……はあ、どうなっちゃうんだろうな……私」

いや、本当は分かっている。分かっているから現実逃避がしたいのだ。

正直言ってさっさとこの場所から逃げ出したい気持ちでいっぱいだ。

けれどそれは何も意味を持たない

どうせすぐ捕まつて終わりだ。

そんな無駄な事をして体力を消費したくない。

すると後ろの方からドアの叩く音が聞こえた。

「すみません。ここに持つてくるよう言われたのですが。開けてもよろしいですか？」

ウエイターらしい。

同時に何かを転がす音が聞こえてくる。話的にそれが持つてくるように言われたという物なのだろう。

「はい」と空返事だけしてドアを開ける。

ドアは最初開けた時よりも幾らか重く感じた。

ドアの先には銀色のワゴンをもったウエイターが立っていた。

ウエイターの割には筋肉質な人だなと思う。

「あ、すみません。これ中まで運んでも良いですか？」

ウエイターはそう言うとワゴンを見せた

すこし無礼な気がするが、なかなか美味しそうな匂いがしてくる。多分ローマンが頼んだものだろう。

「はい、ありがとうございます。お代は？」

「いえ、大丈夫です。先に頂いていますので。では失礼しました。」

そう言うのと台をそのまま中へ置いて出て行つた。

なぜ台ごと置いて行つたかはとやかく言わないでおこう。

暫くはどうも出来ないので放っておくことにする。触らぬ神に祟りなしと言うし。

そして私はさつきまで座っていた椅子にまた腰を下ろす。

もう時間は夜の9時を回っていた

「にしても。暇だな……」

フラグと言うべきなのか。

そう呟いた次の瞬間ドアが開く音が聞こえてきた。

「今帰つて来たぞ。ハニー」

そこにはローマン・ゴードンがニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべながらこつちを見ている。

「おかえり……」

「なんだ。ハニー元氣ないぞ？」

心配した様子で見つめているが視線が胸の方に向いている。

---

偽物

これがハチ君が言うそれなのだろうと思う。

これが本物なのなら私はこんなもの要らない。

「大丈夫ですよ。何も・・・」

私がそう言うと彼は少し不服な声で言い返す

「・・・・・・・・・・・・・・・・まさかお前、あの小僧の事を思い出してるんじゃないだろうな？」

その瞬間、胸の奥が軋む音がした。

「はあく・・・・・・・・あのな、お前は今日からこのローマン・ゴードンの妻なんだよ。あんただのガキのどこがいいんだ」

何も・・・・・・・・何も知らない人が何を言っている。

「大体あんなガキと俺を比べないでくれ。不愉快だ。」

そう言つてのけるローマンに苛立ちを隠せない。

気付くと私は拳を強く握っていた。

「そんな奴の事忘れろ」

ローマンは一言そう言った時。

——  
私は彼の頬をぶっていた

「ガッ………!!??」

叩かれたところを必死に抑えるローマン  
見るとローマンの口から少し血が出ていた。

「このアマあ!!調子に乗りやがって!!!」

するとローマンは私の胸倉を掴む。とても興奮している様子だ。

「こうなったら徹底的に犯してやる!!葉漬けにして俺の屋敷の地下で一生調教してやる!!!他の女と一緒にな!!!」

吐き気がする。こんな男と同じ空気を吸っていることも。こんな男に触れられてい  
ること自体も。

「フフフ・・・ハハハハハハ!!!これでお前は俺のものだああア!!!!!!」

そう言うとローマンは私の腰のベルトに手を掛けた。

それに対抗しようと手を掴むが逆につかみ返され身動きが完全に取れない。



「キヤツ!!・・・」

ベットに押し倒される。

悔しさと侮辱の念がこみあげてくる。私は憎々しくローマンを睨むがどうでもいとばかりに顔を近づけてきた。

「ハハハ・・・悔しいか? どうだこれから女になる感覚は・・・あんな奴の事なんか綺麗さっぱり忘れるくらい気持ちいい体験をさせてやるぜ・・・」

その手は胸に向かって伸びている。

「・・・やめて・・・や・・・」

「黙れ!! もうお前は俺のもんなんだよ!!! いい加減それに気づいて俺に体を差し出せよ!!」

意識が遠のいていく。瞼を閉じまいと必死に目を見開く。それ自体が私の忘れたものだと言わんばかりに。

苦しみがあつた。悲しみがあつた。自由があつた。

私はその中の何一つ残つてなかつた。

だけど、ただ一つ忘れた物があつた。

例えどんな時でも誰にでも。苦しむ人がいるのなら愚痴を言いながら。でも何だかんだ助けてしまう人がいた。

どんなに人に嫌われようと。どんなに人に避けられようと。その人は他人のために生きていた。他人のために自分が汚れていくことも顧みずに

彼の生き方は不器用ではない。だけれど器用でもない。寧ろ泥臭く。清潔とは程遠い存在……でも……

「助けて・・・ハチ君・・・」

— このクソ野郎  
!!!!  
—

でもその拳と心は誰の物よりも綺麗だった。

## 16話：判決

青春バンザーイ青春バンザーイ……まあ、そんな風に人は青春というビッグイベントを好む。

アイスにも青春の味とか言っちゃう時代だ。そもそも狂ってる気がしなくも無いが……

だが、言っておこう。そんなバンザーイと言える青春はほんの一部しかない。

青春には二種類のタイプがある、

一つはいわばリア充タイプ。自分の思い通りに行かずともそれなりに楽しんで日常を過ごすことが出来る。つまりバンザーイできるタイプ

二つ目はいわばインキヤタイプ。リア充どもの影に隠れ何もなく青春を終えるタイプ。

俺は間違いなくインキヤタイプだろう。

むしろインキヤの王様とまで言いたいくらい拗らせていると自覚しているしこれはきつと周囲も感じている事だろう。

え？なんだって？女の子二人に囲まれて、しかも幼なじみがいる時点でインキヤじゃ

ない？インキヤ舐めんなだつて？

はて、何のことだろうか、

まあ、いいや、そんなインキヤにも一つ二つの問題がある。友達が出来ないこととか、恋人が出来ないこととか：e t c、

だが、それとは裏腹にキチンとインキヤにもメリットがある。

それは、一人でいる時間が多かったり、居なくなつても悲しむ人間がいらないと言う点だ、まあ、人によつてはデメリットだらうけど、

けれど、今の俺としてはこれ程、好都合なメリットは無い。

何故かつて？……簡単だ。

「……………このクソ野郎!!」

「グハア……!!??」

だって、そのおかげでこのクソイケメンをブン殴ることができるのだから。

奴はズザザザと床を這いずり壁にぶち当たった。

俺は奴を殴った拳を突き上げる。するとベッドの方で腰をかけていたエルフエがこつちを見る。

「……………ハチくん、」

「よお、エルフエ。奇遇だな…たまたまよ、たまたま近くに寄ったからたまたま助けに来た。」

言い訳しつつ彼女から視線を外した。

次の瞬間、胸のあたりに振動が来て、そのまま重みが加わった。

「……………え、エルフェ?」

抱きついているエルフェに目を向ける。

「……………ごめんね、ごめんね、ハチくん…」

ゆっくりと嗚咽まじりに聞こえる声に息を飲む。少し、少しずつ、その重みは軽くなっていたような気がする。

「大丈夫、大丈夫だから…よく頑張った。今は俺が居るから、安心しろ」

「ヒツク……………ウン…ウン」

「ぐ……………き、貴様ああああ!!何故ここにいる!?!」

ゆつたりとゴードンは起き上がる。殴られた頬を片手で抑えながら言った。



「お前、何したか。分かってんのか!?この俺様の!俺様の顔を!!!俺の至高な顔を傷つけてただで済むと思ってるのか!」

ゴードンを俺は睨め付ける。

分かってている。あいつの商品は顔だ。あの顔には何百億とつく保険がついている。殴った時点で俺は犯罪者だ。

だが、俺の中で何よりも許せない事があった。

「……傷ついたのはどっちだよ?」

もはや許せない事がどれなのか分からない。

あいつがエルフェに俺を忘れると言った事か?

あいつがエルフェを押し倒した上で犯そうとした事か?

それとも、彼女が泣いていたからか?

「傷ついた？お前がか？……はっ、女が取られて悲しいって訳か、ふざけるなよ。」  
ゴードンはそう言い、拳を作る。

「ヒキガヤハチマンだったか？お前は知らないだろうがな。その女はもう俺のものだ。  
！その女は……」

「金で売られたんだろ？……知ってる」

「…何？」

俺はすかさず、ポケットに入っていたスマホをだす。

「これが全てを物語ってる」

そして再生ボタンを押した。

『フ……ああ、かなりな……にしても自分の娘を金で売るとは……まさに外道だな。  
だが面白い。』

『口をお控えください。それは私たちに對しての屈辱です。』

エルフェは少しずつ顔が青ざめていく。

「……………セバス？」

「因みに、10分前に相手の方を確保したと言う連絡がきた。次はお前だよ。ローマン・ゴードンさん。」

キツとゴードンは俺を睨めつけた。

「ありきたりな表現だが…………お前はもう死んでいるってやつか？」

「貴様…………どこまで俺をコケにすれば気が済むんだ……」

「ハっ…………それは、お前もだろ」

俺は拳を作る。

「何が、世界一のイケメンだ。」

何が、ハリウッドだ。

何が、人気俳優だ。

俺はお前を許さないし、俺はお前を理解しようとは思わない。

お前は俺の敵だ。」

言い捨てる。

ただただ、必死に奴に対抗する。

前に、俺は奴を雑魚といった。訂正しよう、アイツは本物のクズだ

「貴様は！貴様は！貴様はああ!!」

銃を持ち出す。

「銃刀法違反か……どうとう終わったな、お前……」

「そんな物、全て金で解決できる。お前と一緒に全て闇の中さ。」

まったく、分からないのだろうか……少しゴードンが可愛そうに思える。

「全く……俺が一人でここに来たと思ってたのか……つくづく残念な奴だ。」  
「何？」

次の瞬間だった。

バキッと何かが鳴った。

「拘束!!」

いつのまにかゴードンの後ろに回っていた筋肉質な男達。それを指揮する女が出てきて、ゴードンは一瞬にして、身動きが取れない状況に陥る。

「ぐ、なんだ？なんなんだお前たちは!？」

慌てふためくゴードン。

しばらくして、エルフェは筋肉質の男を指揮をするの女を見つめる。

「……ニユーちゃん？」

咄くと万木はゆつくりエルフェを見定める。しばらくするとニヤツと笑いエルフェに見せた。

「久々だな。リユー、助けに来た。」

まあ、お前の夫に無理やり連れてこられたって方が正しい気もするが」

「おい、姉御、あんまそう言う事言うなよ、恥ずかしくなる。」

すると、エルフェは真つ赤な顔をするが気にしない、気にしない…

ふと俺はゴードンを見下げる。

こいつには中々苦労した。

「まあ、そうだな。ゲームオーバーだ。ゴードン」

「、、くっ」

ゴードンは暴れ疲れたのかぐったりと下を向いた。

それからしばらくして、ゴードンは捕まった。

後々の家内調査で彼の自宅かは女性の遺体が12体ほど出てきた。その女性たちは皆、ハリウッド女優でしばらく前から行方不明だった女優たちとの事だったらしい。

彼曰く、ハーレムを作りたかったとの事、

これに怒ったのが死んだ彼女たちのファンだった。

ある日彼の家は何者かによって放火された。

それはだっだんと広がり世界中のすべてのローマン・ゴードンの別荘が完膚なきほどに叩き潰されたり放火されたりした。

これを「ローマン炎上事件」と呼ばれ、

彼は世界一のイケメンから世界一のクズ野郎に格下げされたのだった。

因みに彼の判決は終身刑らしい。

2ヶ月後、

皆ローマン・ゴードンの事を忘れた頃。

## 最終回：君じやなきやダメみたい

変にゆったりした時間だった。

最近はずいぶん忙しくてこんな時間は久々だ。ゴードンが捕まった後、エルフェの両親についても色々な黒い事実が浮かび上がってきた。人身売買、麻薬の密造、兎に角金になる事は何でもしたという。そしてエルフェの稼ぎを根こそぎ奪い取って自分は豪楽に酔っていた。これだけでも腹立たしいのにまさか自身の娘を金持ちに売るとは……もはや手に付けられないほど、腐っていた。

金は人を惑わせるというが、まるでそれを体で表現したような話だ。

……あく、話がずれたな。忙しくてこんな暇なのは久々だつて言う話だっけ？まあ、理由としては、あれだ。エルフェの事だ。結局両親が捕まったエルフェは孤児みたいな立場にいた。なんでも親戚は誰も頼れないらしい、で、俺の両親が彼女を養子として請け負った。親父もお袋も彼女の事は気にかけていたという。

……その時のアイツの顔が忘れられない。



何度も、何度も、何度も親父たちに感謝していたのは言うまでもない。ずっとずっと、自分自身に無理を強いていたのだ。誰にでも幸せになる権利はある。なのにそれを許されなかった。哀れという言葉では言い表せないほどの悲しみが俺の中を渦巻いていた。

彼女は言う。苦しくても悲しくてもハチ君との思い出があつたから頑張れたんです。つて、そのハチ君は俺じゃないってわかつていながら俺は頬を染め上げた。

正式にエルフェが養子入りした頃には世の中からローマン・ゴードンという名前は無いものとして扱われていた。アイツが終身刑だと聞いた時なんというかほつとした。今後アイツがあそこから出られたとしても、もはや、居場所なんて無い。なら出れない方がアイツの為にエルフェの為にいいんじゃないかって思っていたからだ。

この様に2カ月で色んな手続きが終わった。エルフェの持ちもんとかいろいろ持ってくるのにちよつと時間かかったがそれもいい思い出だ。

ただいま日曜日の午前10時、先週とか先々週のこの時間は色々あつて死ぬかと思つたけど今週は久々の暇だ。俺はリビングの日当たりのいいソファで惰眠をとつていた。

「ねえ、俺……」

ふと、頭の中で何か声が響いた。

「なんだよ、僕」

この「僕」……いや分かりにくいな……とりあえず八幡（表）、と表しよう。こいつは2年程眠っていた挙句、俺に寝る前の尻拭いをさせた張本人なのでちよつと、反省してもらおうと最近では神経系つかって奴にちよくちよくちよつかいを掛けてる。たまに仕事が長引いてイラついてるときに精神内で寝てるコイツのケツを思いツキシ蹴り飛ばしたりするとそりやあもう、面白い反応を見せてくれる物だ。

「これからどうするのさ？」

「ん、そだな。普通に学校行って……」

「いや、そうじゃない」

話を区切らされる。

「……………リユーチちゃんの事だよ。」

「……………」

静かに風が流れる。気づいた時には手汗がソファアにこびりついていた。

「リユーチちゃんはさ、君の事が好きだよ？」

分かってんだろと言葉を付け足す。

【君は彼女の気持ちが無碍にする気かい？】

「そうじゃない、そもそも、それはお前への気持ちだ。俺への気持ちじゃない。」

そもそも彼女がここに来た理由はこの八幡（表）に会うためだ。俺なんかはそのおまけに過ぎないのだ。

『たしかにそうだ。だけど、それが変わって来てるのを分かってるんでしょ？君は』

「……………」

黙秘権を行使する。やっぱりコイツ俺だ。俺が今一番言われたくないことを軽々しく言いやる。

俺はケータイの電源を付けると、ゲームを始める。

『ピリン♪』

軽快な受信音と共にメールの通知が届く。なんとなく通知タブに触れてメール画面にたどり着いた。

【へえ、リユーちゃんから…ねえ…】

こいつ、笑ってやがるな…顔があつたらぶん殴りたい。

【ええつと…今から出かけられますか？だつてよ。暇だろ？行ってこいよ。】

コイツ…あとで覚えておけよ

俺はとりあえず『大丈夫』とだけ送る。すると僕がブーブーと反論しやがったが、俺

はしばらく無視を突き通す。

とりあえず俺は立ち上がり出かける準備を始めた。ん？何処に行けば良いのかわかるのかだつて？

実は今日、エルフェは霧雨と万木と一緒に女子会だそうだ。場所は事前に知っているし、どうせ、霧雨辺りが『久々に幼なじみ全員で集まろうよ！幼なじみ3人が集まって八くんだけ仲間外れなんて可哀想だよ！』とかなんとかかんとか言つて他の二人が肯定したんだろう。なんだかんだいって彼奴ら、奉仕部のメンツみたいによ比ヶ浜みたいな天然キャラには弱いから…いや、あいつはバカだな…しまった、差が深まってしまつた…

そんな事をしていて、メールが帰ってくる。

えつと……地図をスクショで撮つて送つてきたらしい。……あれ？カフェじゃない…公園……？

しかも、この地図何処かで見覚えがある

「おい、僕。この地図知ってるか？」

「まったく……全くもう、使い魔扱いしやがつて……え〜つと？」

すると八幡（表）はへえと小さく頷いたように声を漏らした。あまりに深妙そうに眩くものだから俺は八幡（表）に問いかける

「で？・どうなんだよ？」

すると八幡（表）は楽しそうな口調で返してきた。

【いんや？知らない♪】

ぜってえ、嘘だろ…

☆☆☆☆

「はあ……送っちゃった…」

とある、公園。ブランコに捕まったままりーラ・エルフェは呟いた。ここにあと10分程で彼が来る。そう思うと胸の辺りがキュツと苦しくなる。

「……………」

ふと、ブランコの下に溜まった水溜りに自身の顔が写しこまれた。その顔は真っ赤に染まっていてとても人様に見せられた顔じゃない。

まずい！まずい！まずい！送ってしまったけれど、今彼にこの顔を見られるのは非常にまずい。

真つ赤になつた顔は白い髪に合い重なつてすごく目立つ。とりあえず頭を冷やそうと水道の近くに歩き出した。

最初に言つておくと。この公園に彼を呼んだ理由。それは、……うう……い、一般で言う所の……こ、告白です／＼

言おう、言おう、言つてしまおう……私はハチくんが……すす、好きです！……まあ、これに関しては最初から言つてた事だし、周囲の事実なんですけど……よ、良く考えてみたら……ほ、ほら、すすすす……好きなんて言葉一回も言つてないなつて……／＼（番外編以外で）

そ、それに一度ここに二人だけで来たかつたつて言うのもあつて、ここは私が初めて彼に会つた所なんです……そして、私が彼に結婚しようつて言つた場所でもあります。

ハチくんは私が初めて会つた時のハくんじやないと言つた話を聞いて、まだ、昔のハチくんに期待しているのかつて言われると……まあ、そんな所もあるでしょうが……正直に言うつと、今は今の彼が好きです。

あれ？これつて、不倫になつちやうのかな？私つてこんなにいやらしい女だつたんですね……

で、でも、この気持ちはもう止められないから……

「……………ふう、頑張らなくっちゃ…」

「何をだよ？」

後ろから声が響く。

「ヒツ…!?!」

私は声を少し漏らしてしまった。この声の持ち主を私は知っている。

私は少しずつ、少しずつ、後ろを見渡した。

「よ、エルフェ…どうしたんだ？こんな所で？顔洗つて…？」

「は、は、は、ハチくん!?!」

彼の顔を見てまた、顔が真っ赤になった様に感じる。

「エルフェ!?!どうしたんだよ!?!なんかお前の顔真っ赤だぞ!!一回病院でも…」

「いやいやいや、違うから!大丈夫ですから!」

私はケータイを取り出した彼の手を掴む。こんな事で救急車呼ばれたらたまつたものじゃない。必死につかまつた。

最近彼は心配症な節がある。私の事を優先的に考えてくれるのは嬉しいけど…少し行き過ぎる傾向がありそうだ。小町ちゃん然り。

「そ、そうか？そうは見えないが…」

不安そうに私を見ると渋々携帯をしまった。

「で？どうしたんだ？今日は女子会だつて聞いたが…」

「そ、それは、え〜つとね…その…えつと…」

女子会は嘘ではない。みんなに告白するにあたつてどうすれば良いか話し合っていた。さつきまでは。

でも、いざ、言うとなるとやっぱ口が噤まれる。断られたら怖いとか、今まで感じなかった恐怖もだんだんと積み重なってきた。

「……………そ、その…」

「……………」



「……しばらく無言の時間が流れる。

彼は、頭の上にハテナを浮かび上がらせながらも真剣に待っていてくれた。

「そ、その……私は……」

私ってこんなにどんくさかったっけ？ 嗚呼、ひどいな。これは……自分が恨めしく思う。もっとパツて言えたら楽になれるのに……

「だ、大丈夫か？」

「は、はい……大丈夫です……けど、これだけは……」

私はまだ言い出せない自分な腹立たしく思いながら軽く自分をつねった。

「そう、自分をあまり責めない方が良くぞ……逃げるのも手段の一つだ。」

「でも、それじゃあー！」

私がそう言うと彼はニヤツと笑った。

「いいんだよ、逃げて、戦略的撤退だ。逃げないで、お前が傷つく、位なら。」

彼はそう言うのと遠い目をする。彼は何を考えてるんだろう、それは世界7不思議の一つに値するだろう……

「……」

「……ふう……もう大丈夫です。言えます。」

私がそう宣言すると、ハチくんは私を見つめた。

「……私、貴方のことが好きです。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………」

正直、こんな時どうすれば良いのかわからない。

俺は、真っ直ぐに、真っ直ぐに俺を見つめる彼女に圧倒された。

「……………」お前の言うハチくんは俺じゃないぞ……………」

振り絞った言葉に覇気はない。エルフェは俺を見て言う。

「たしかにあっちのハチくんも好きです。けど、…。今は、私は貴方を所望してるんです。」

「なんで、俺なんだよ…俺は、俺は！」

Q、捻くれて、めんどくさいし…

A、それだけ、色んな事を考えてるって事ですよ。めんどくさいのはただ貴方が奥手なだけ…

Q、ボツチだし…

A、浮気の心配が無いですね。

Q、あとは…あとは…

A、私にハチくん問答で勝てると思いますか？

「貴方が自分の嫌いな所をいくつあげても。私は、私の全てを持って貴方を愛してゐるつて言いますよ。他の誰でも無い……」

私は貴方が好きなんです。」

俺の頬は真つ赤に染まった。きつとそれは先程のエルフェの様に、嗚呼、そうかさつきはそれを考えていたか……

【君は……君はどうしたいんだい？】

俺は……俺は

何も返せない、返す言葉もない。

ただただ、啞然と彼女の顔を見つめた。

【君は頑張った。本当に……だから君は君の望むままにしなよ。】

お前は良いのかよ？……お前は……エルフェはもともと俺じゃなくお前を求めに来てたんだろ。お前は……こんな結末で……

【僕は君だ。そう大差ないさ】

大差あるだろ。お前と俺では意識が違う、

【大差ないさ。僕は君だ、いくら見繕ってもそれは変わらない。それに君も…好きなんだろ?】

……………っ

【自分の事は自分が良くわかってる。さあ、どうするか、君が決めて。僕は決断に従うだけだ……まあ、ちよつとは文句言わせてもらうけどね】

俺は…俺は…

俺はしばらく固まったまま動けなかった。正直いまだに頭の整理の目処がついてない、中学の時の告白とは違う。いやその告白自体なかった事なただけど、俺は口を開かない口を開く。

「お、…俺は…心を出すことが苦手だから、はつきりとは言えないし、そう…何度もい

えないと思う、だけど、今だから言える。」

正直この返答があつてるかは分からない。

でも僕がこの場においても答えはきつと変わらない。俺がそうだった様に

「好きだ。」

返答としてはあまりにも不格好な言葉を返事として返す。だけど、この言葉に迷いは無かった。さつきまで俺を押さえつけていた迷いはこの青空の彼方に消えた。

運命なんでものは初めから決まっていたは意味は無いなんて言うが、それは通して見てから言える事だ。決してこの結末が正解だとは思わない。

だけど間違いではないと思っている。

そして彼女は笑って、言うだろう。

「はい！私も愛してます。」

って。



E  
N  
D



# 番外編：煩惱退散、煩惱退散んんつつつ !!!!

日曜朝、いつもはプリ〇ユアの時間なのでもうとつくに起きてテレビの前に居座っている時間帯だったのにその日に限って寝過ごしてしまった。

プ〇キュアを犠牲にした代理条件で素晴らしい朝（プリキ〇アを見てない時点で今日のやるべきことは終わっているが）になった。もうやることないけど。

でも、まあ、何と申すかまだ怠い。まだ寝てたいって言うか。寝るわ。〇リキュア見れなかったし

どうせわざわざ俺を起こしに来る奴なんかいないだろうし：「キヤツ：：：ん？  
今誰か「キヤ」って女っぽい感じで言わなかったか？

あれい？なんか手に柔らかない感触とぬくもりが：：：：：

「：：：：： って!!何やってんだエルフェ!!??」

そこにはいつの間にかベットに潜り込んでいたエルフェの姿があった。

なぜか『やってやったぜ☆』と言う顔をしながらこちらをニヤニヤと眺めてく

る……クツソ可愛いじゃねーかコノヤロー。

するとエルフェは白い髪をバサツと撫でながら俺の顔を覗き込んだ

「おはようございます。ハチ君？昨日はお楽しみでしたね？」

「さて、お前俺に何をした？」

エルフェの発言に俺はすこし動揺しながら聞く。

するとエルフェはニヤケながら答えた

「知ってますか？女の子には秘密が付きものなんですよ？」

「おい!!!おまつ!!何しやがったああああ!!!」

結局答えてくれなかった。

☆☆☆

とまあ、そんな事色々がありました。

俺は自分の理性を鍛えなおすことにした。

理性とは抑えてなんぼの長物である。抑えられない人はDSかDM。それかただの変態だ。

俺は理性の化け物とまで言われた比企谷八幡だぞ？それをよくもまあもて遊んでくれたなあ？なあ？エルフェさんよお？俺のテクニクで泣かせてやるぜっ（意味深〔特に変な意味ではないことは確か〕）

と言う事で。私くし事、比企谷八幡は土曜と言うサマーじゃないバケーションを削つて。神社へ座禅を組みにを来ております。

「フンッ!!!」

「あいつたあああああ!!!」

「煩惱退散っ!!!」

「ぼ、煩惱退散!!!」

ていうか、なんだこの人。さつきから煩惱退散、煩惱退散。痛いし、うるさい。

「何か言ったかね？」

「いつ、いえ何もっ!!!」

心を読んだだとお!!??

「はあ……」

でも、まあ。よくもここまで今の俺にぴったしの神社が見つかったよな？

インターネットを探したらすぐに見つけた。なんだか、うさん臭かったけどな。

隣を流れる滝もきれいだし。なんか滝行も出来るらしいし。ここまで俺にぴったりな神社もなかなかないよな。

まあ、神主の姿が中学生つぼいのは置いておくとして。

「そうだ、滝行してみないかね？」

ニヤニヤと俺を見る神主。

うさん臭いし。よく見ると頭の禿げの部分ズラだ。そこから髪の毛ボサツて出てきてるし。でも、出来るならやりたいし……めんどくさいけど……

「じ、じゃあ、やってみようかな？……」

「そうかそうか……やあ……りい……たあ……いんだねエ……？」

今なんか言い方可笑しかった!! 言い方おかしかった!!

俺は少し動揺するがそれを知らんとばかりに手を取る神主。なんか怖い。

「さて、行こうか迷える子羊よ。俺の神道、見せてやるよ」

ニツコリと今日一番の笑顔を見せる神主、結論「この人怖い」

☆☆☆

———  
私は無である。

滝にあたりながら思った。

そうなんだみんな無なんだ。

今の私には性欲などない。

欲望もない。

つまりこの状態こそが仏に一番近い状態。

仏とは無欲なのだよ。

だから人々に等しく愛を与えてくれるのだ。

私は悟りを開いて「はい！はい！はい！悟りなんか開くな！！目を覚ませ！！」

俺は目を覚ます。目の前にはやっぱりハゲのズラなエロい中学生が居た。

どうやら悟りを開く一歩手前だったらしい。危なかった。

「じゃあ、取り合えず次の修行をするぞ？」

「あ、はい、分かりました」

俺は濡れた服を持ちながら立ち上がる。

神主についていくと仏間に連れていかれた。多分、雑巾がけかなんかだろう。そう

思っていた……………この時までには

「じゃあ君にはこのおっぱい仏像の手入れをしてもらおう雑巾でしっかりと拭くように！！」

「いやいやいやいやいやいやいや… おかしいだろ！！色々！！」

そこには大仏と言うよりは裸の女の像が立っていた。

「うん？何がおかしいのだね？キミイ？」

「いや、ここ神社でしょ？なんで仏像じゃないんだよ!!?」

「H A H A H A、面白い事を言うねエ・・・神社によつてそれぞれ祭っている神が違うのは知らないのか？つまり俺の神社が祭っているのは……………おっぱいだ」

こ、コイツ・・・煩惱退散とか自分で言つておいて。おっぱい祭つてやがるだとお？

「とりあえず、しつかりと拭いておきたまえ。ガハハハハハ・・・」

笑いながら何処かえ消えていく神主。クソツ、とんだ変態神社に来てしまったようだ。

「……………しかし、どこから拭いたらいいんだ？……………これ……………」

俺は目の前の自分の現状に焦り始めたのだ。

『これを拭くとしてだ・・・もし、こんなところを誰かに見つかったらどうする？どうすればいい？こんな山奥の小さな町だ。俺の知っている奴が来るとは思えんが。それでも見つかったらやヴあい・・・警察に連絡されるのがオチだ』





『分かってたけど、由比ヶ浜さん来てたのね?』  
何故か由比ヶ浜には少し冷たい八幡だった。

「どうしたのかね? 君たち?」

神主登場。やばい。絶対ダメな奴やん。

だつてほら神主の目見てみ? 来てから由比ヶ浜のある一定の部分しか見てないもん。  
他は…… まあ、ごめん

「すみません。比企谷八幡くんっていますか?」

エルフェが神主にそう言った。

「ああ、今日来てる訓練生の事かね? それがどうしたのかね?」

え? 待つて訓練生って何

「お弁当持つてきたんですけど。良いですか?」

「ああ、いいよ私もそろそろお昼にしようと思つていたからね。」

わざとつぽいんだよ。神主!! もつと自然にしろ。

「じゃあ失礼しまーす」

ニコニコと神主は笑っているのを横目にエルフェたちはずかずかと館内に入り始めた。

クソツツ!! 仏間まであと、10メートルどうする!! どうする!!

「あ、じゃ、ここで待っててね?」

へ?..... 神主!?

「おい、早く来い。昼飯だぞ」

「おおおい!! 神主イイイ!! 今のはあれだろ??!! エルフェが入りそうになるところを俺がどうにかするって感じの所だろーが!!」

「知らねえええよ!! ここにやあ俺の趣味の異物だつてあるんだ!! 女には見せられないものだらけだからねエ!! 女に見せたら完全に破壊される。どつかのチョップ女みたいになあ!!」

女にどんなトラウマがあるんだよ。おっぱい祭ってるくせに。

そう思いながら渋々付いて行く。

「あ、ハチ君久しぶりです」

「こんにちは比企谷君」

「やつはろーヒツキー」

上からエルフェ、雪ノ下、由比ヶ浜の順である。

俺は神主の隣に座る。

「どうしたんだ？お前ら。此処のことは誰にも言っていないはずだが」

「小町ちゃんに聞いたんだよ。おそらくここだろうって」

どんな情報網してんだよ。妹よ。そしてそれを完全に信じるお前ら、どこから出るん

だよその小町への絶対信頼は。

「にしても、どうしてこんな場所で修行なんかしてるのかしら？休みを削ってまでして」

雪ノ下、それは聞かれたくなかった

「いやな？なんか休みだからと言ってだらけてるのh「嘘ね？」……」

そこで横やり入れるな雪ノ下

「まあいいわ。何かしらの事情があるのでしょうかうけど聞かないでおきましょう。それよりお弁当を作ったのだけでも食べてくれないかしら？」

おっと〜ここでデレるとはなかなかやりますな。

そう思いながら弁当を見る。どうやらサンドイッチのようだ。

俺はそれを一つ取り口に運ぶ。

「旨いっ!!」

「よかったわ。作ったかいがあった」

そういう雪ノ下。なんか違うね? そう思う

「わ、私のも食べてよ」

その瞬間時間が止まった。

最終兵器、由比ヶ浜である。ああ、死んだな俺…

弁当を見ると、安定のダークマター。

「あ、これ、卵焼き」

この炭が卵焼きですか…俺がおかしいのか、由比ヶ浜がおかしいのか。俺は勇気を振り絞って逝くことにした。

「いただきます。」

それを言ってしまうえば後戻りはできない。箸を使って上手く取りゆつくりと口に運んだ

『サクサクとチツプスのように食べやすく。時々ぐによぐによしてゐる部分がいじらしくて。本来の卵焼きの甘さを打ち消して辛さだけが残った感じ』  
つまりまとめて言うと『死』である。

俺は死んだのだ。

☆☆☆

目が覚めると体が縮んでいるわけでもなく、異世界に行つてゐるわけでもなくただただオレンジ色の空が広がっていた。

周りには死体の山が。何があつた？

「あ、起きたんですか？」

お茶を持ってきていたエルフェに気が付いた。

神主は：： うん、死んでる。

「ああ、目が覚めたらこの惨劇だったから驚いた。」

「あの後大変だったんですよ？ 由比ヶ浜さんの卵焼きがみんなに行き届いちやつて」

そうかだから：： ご愁傷さまです。

「そろそろ帰んなきゃヤバい時間だよな？ みんなそろそろ起こすか？」

「はい。でも少し話に付き合ってもらいませんか？」

その真面目な雰囲気で俺は首を縦に振る事しかできなかつた。

するとエルフェは隣で寄り添いながら語り始めた。

「私ね？ ホントは少し怖かつたんです。」

「：： 怖かつた？」

「はい、ハチ君に否定されたらどうしようとか。嫌われたらとか：： まあ、ホントはもつ

とひどいかつたんですがね？」

「それはくすまなかつた」

エルフェは「いえ」と返した

「でも今はハチ君はどつちのハチ君でも大好きです。前のハチ君もカッコよかつたし。今のハチ君も：： そのく：： かつこいいです／／」

俺はその言葉を聞いて少し顔を赤くする。

「でも、私はどっちにしても……………あなたが好きです。」

だからだろう、彼女の姿に俺は少し見とれてしまっていたのは。

彼女はただただ真つすぐなのだ。真つすぐに恋をしている。だから俺は……………

「そうかよ……………そろそろ、みんな起こそうぜ」

彼女はにつこりと笑って「はい！」と言った。

これが俺の番外編である。

「とーもーちゃん？」

「へ?……………は……………ら?」

「こんなところで神主って……………何やってるのかな?」



「いや〜その〜：：」

「あと、この像何？」

「あ、ああ〜それ〜ね：：」

その後、ある少年の断末魔が町中に聞こえたそうなの。

やはり彼女が帰ってくるのは間違っている!! Re : ma  
ke!!!

Re : make!! 1話 : 間違えてる。

いったいどこで間違えたのだろうか。

「は〜ち〜くん!!!」

そう言いながら抱き着いてくる白髪の美少女の声を聴きながら天を仰ぐ。

教室はこの少女の気迫に飲まれ静かに動揺を示す。とある者は嫉妬の炎を燃やし。とある者は妄想を膨らます。人とは清純であるべきである。

今日は別段特に何も無い日だったはず。何も起こる訳の無い平凡な夏だったはずなのに……

俺は一体どこで間違えたのだろうか

——それは1時間ほど前に遡る

「おにいーちゃん!! お兄ちゃん!!」

7時30分俺はいつもと同じ時間に同じように小町に起こされる。窓からは日が差し込み鳥のさえずりが聞こえてくる。良き朝である。

「お兄ちゃん、朝ですよく起きて。もう、小町の愛情たつぷりの朝ごはんが覚めちゃうでしよ。」

いつも通り愚痴りながら小町は俺の顔を覗く。

何気ない仕草に少しドキツとしてしまったが。妹だからと思うと流石に冷めた。

「ああ、おはよ。」

俺がそう呟くと小町もニツコリと笑っておはようと言う。なんとも幸せ空間なのだろう。いつまでもこの時間が続けばいいのに。いや待てそれフラグだな

「早く下に降りてね。ご飯冷めちゃうから」

「わくたよ。着替えたら下に行く」

小町の問いに俺がそう返すと小町は下へ降りて行った。

別段何もない日こそ幸せなものはない。中二の夢はもう覚めた。

近くに掛けてあった学生服に身を包み。鞆と自転車カギを持って下へ降りる。そこにはいつも通り自分の席に座ってもきゅもきゅ朝ごはんを頬張っている小町が居た

「おっはく。八幡降りるの遅かったね。小町ちゃんが起こしにいったからもう十分ぐらい経ったんじゃない?」

ソファの方から声が聞こえてくる。誰だろうと顔を向けると

そこにはいつもはこの時間帯には居ないはずの母がソファでゆつたりとコーヒを飲みながらテレビを見ていた

「母さん?なんで居るんだ?今日も出張だったはずだろ?」

俺がそう尋ねると母はあっけらかんとした口調で答える。

「いやくね?私もそのつもりだったんだけどさ。なんかその出張が無くなっちゃってさ。どうやら海外の大きな会社に取りられちゃったみたいでさ」

そう母は答えたが。実態が分からない状態で俺は「はあ?」と答えるしかなかった。

すると母はテレビを指さす

「それよりねえ、八幡。これ知ってる?」

「あ?ハリウッド女優引退?なんで日本のテレビがそんな事特集してんだ?」

「いや、そんな事はどうでもいいとしてこのハリウッド女優の子の事覚えてる?」

「は?覚えてるって?」

そう言った瞬間母はニヤケ出した。不気味なほどに

「ふくん、そうかそうか。覚えてないか?..じゃあこれは楽しいことになりそうだねえ

？」

完全に何か企んでいる顔である。

「おい、かあちゃ「お兄ちゃん!! 時間時間!!」

小町に途中で話を途切れさせられる。

時計を見ると8時ちょうど。はつきり言うど… かなりやヴあい時間である。

「やべっ!! 小町行くぞ!! じゃあ行ってくる母ちゃん!!」

「うんじゃあね〜小町ちゃん。八幡… フフ」

母の最期の笑い声になんか嫌な予感を感じながら玄関を出て自転車にまたがる。

すると小町が俺の自転車の後ろにいきなりまたがり指を前に刺す。

「じゃあ出発シンコー」

「お前乗るんだ… 仕方ないな…」

そうため息をつきながら自転車をこぎ始める。

☆☆☆

「あ、じゃあ… 正しいよー」

小町は俺に止まる場所を指示する。時間にはまだ余裕がありそうだ

「じゃあ。行ってくるであります!!」

そう敬礼して小町は校門に走っていく。すると男子たちは小町を前にしてニヤケ出す。おっと、野郎ども。小町に近づいてみる……即死刑だぞゴラア?

暫くして自転車を再び出発させようとハンドルに手を差し伸べると籠に黒いものが見えてきた。特徴ある小さめの丸い箱……あれ?……… 弁当

「おっにいちゃん!!」

「…… バカ」

俺は小さく呟いた。

暫くして俺も学校に着き。自転車を駐輪場に置き教室に行くいつも通りの毎日。

だが、今日は何かが違った。教室がいつもより少しうるさい。賑やかがクラスの特徴であるこのクラスでもこの賑わいは異常である。

すると近くに座っていた由比ヶ浜が声を掛けてきた何か知ってるようだ。

「おはよ!!ヒッキー!!なんかね。今日転校生が来るんだって!!それでみんな盛り上がっちゃってるんだよね」

「ほう転校生ねえ… だからこんなに賑やかなのか…」

合点が行った。そうか転校生か… そりゃあ一世一代の大盛り上がりになる訳だ。

「その転校生、女の子らしいよ。しかもかなり美人!!」

「その情報はいらぬが… 女かあ… 嫌な予感しかしない…」

俺は項垂れながら机に突っ伏す。別に意味など無い。ただ眠いだけだよ。

「でも、ヒツキーなんかみんなと違うね? 何も期待してないっていう感じがさ…」

「そりゃあそうさ。もし来た時その子が残念な子だったらどうする?」

あ、残念っていうのは顔だけじゃないぞ? 性格もろもろを刺しているが… やばい、

これ以上は墓穴を掘っている気がする。

「ヒツキー。いつも通りひねくれてるねえ」

「うっせ。こりゃあ俺のアイデンティティだ」

「あいでんててえ〜?」

「あ、ごめん難しい言葉を使っちゃって。」

バカにするなし—とか言っている由比ヶ浜を尻目に俺は眠りに入る。

転校生と言ってもどうせ俺とは関係ないだろうし… 寝てもいいよね?

「あ、ヒツキー!! 平塚先生来たよ早く起きて!!」

ぞ  
!!??

つて!!待て、何故平塚先生なんだ!?!うちの担任じゃないはずだ

「全員静かにしろ。ホームルームの時間だぞ。あと比企谷後で職員室な」

何☆故☆に☆!!??

扉が開く音とともに甲高い大人の女性っていう感じの声が届いてくる。ついでに死刑宣告された。

さすが進学校だけあって先生の声を聴いた瞬間一気に教室の喋り声と言う雑音が消える。

「冗談はともかくとして。今回のホームルームは担任の先生が出張でいないので私が担当する。よろしく」

よろしくお願いしますと皆が言う。

だが、今一番気になってるのはそんな事ではなかった。担任の先生が変わるとするのは一年に一回は必ずある事。はつきり言ってどーでもいいのだ。

「あゝ、知っている者も多いだろうが。今日転校生が来ることとなった。」

一気にざわっと盛り上がる。



「やはりな流石高校生。： 情報が早い。まあ良い入れ」

平塚先生は扉に向かって手を促す。

扉の外に転校生がいるのだろう。よくあるパターンだな。俺はひっそりとそう思う。そして入ってくるのを待っていた。

……しかし、誰も入ってくる気配はなかった。

「あ、あれ……？入ってこーい。」

平塚先生は柄にもなく焦っている様子だ。手を必死に振っている

「は——く——」

後ろの方から気配と小さな声が聞こえてきた。

冷汗が流れ出しついでに涙も出てくる。

何かに怯えてる？いや違う歓喜の涙だろう……しかし何故……

お前は誰だ？

俺は振り返る

「は〜ち〜くん!!!」

腰のあたりに衝撃が迸り。  
俺は天を仰いだ。

# Re : make !! 2話 : フロリダって…あれ?

嫉妬、怒気、興味、衝動

そんな視線にはもう慣れた。負の感情から俺の思想は生まれたようなものだし、そういう感情の思想は一生俺についてくるのは分かっている。

自分で蒔いた種だからそれを拾うのも自分自身だ……だが…ひとつ、今回ののはなんか…違うんだよなあ

「はくちくくく!!」

俺は白髪の子に抱かれながら必死に現実逃避を図る。

教室は沈黙と化し。まるで時間が止まったように動きを止める。

ある者は目の前の衝動に身を任せ怒りを感じ、ある者は考えるのをやめ、ある者は今後の展開へと期待を膨らませる。

「はちくん? どうしたんですか?」

この場を作った張本人は何も気づいていない様子（もしくは気にしてない）。その後も何事もなかったように俺の腰を締め付け続ける。

しばらく止まっていた時間は最初に気が付いた平塚先生によって動かされる。

「え、エルフェ。ホームルーム中だぞ仲が良いのは結構だが今はTPOを考えてくれ。」  
すると腰に引つ付いている白髪の少女は顔を真つ赤にする。

「やつと気が付いたみたいだ。」

「あ、ああ、す、すいません！」

「やつと離れてくれた。少し締め付けられすぎた腹を抑え彼女に目をやる。」

「見事なまで真つ白な白髪を伸ばし。雪のように白い肌を晒している。」

「あ、あれ？」

教室の誰かがボソツとそう呟いた。何かおかしい。いや、彼女におかしい所がある訳ではなくここに居る誰もがその子を知っていることがおかしいのだ。彼女とここに居る全員は今初めて会った筈。なのに知っている。彼女を知っている。

察したように平塚先生は口を開く

「あく、では。エルフェ自己紹介を頼む」

「は、はい。り、リーラ・エルフェと言います。前までアメリカのフロリダ州のほうの学校に通っていました。よろしく願います。」

「彼女は悠長な日本語でそう語る。」

「ふ、フロリダって……は、は、は、ハリウッド!？」

「誰かがそう叫ぶ。なかなか滑稽な合間に叫ぶのだがそれは笑い事ではない。」

ハリウッドと言えば映画の都。しかも今朝のニュースでハリウッドで事件が起きていた。急にとある有名女優が引退を発表し表舞台から姿を消したのだ。

「ま、まさか……………」

あり得るはずがないあり得てはならない。

この広い世界のしかもこの日本の千葉の高校に…

「あ、はい、す、少し前まで女優をやってました……………」

元とは言えどハリウッドの女優が居るなどは

「……………はああああああ  
?????????!!!!!!  
……………」

☆☆☆

「どういう事なんです!?!平塚先生!!うちの学校にこんな有名人が来るなんて!!」

「知らん!!私だって驚いてる!!第一にだそんな情報をだ。私が知っていると思っ

のか!？」

さつきから生徒と先生の問答が激しい。

ホームルームはとづくに終わり一時限目が始まるうとしている。因みに次の教科は国語、平塚先生の担当科目だ。

「ああ、もう!!わかったわかった!!次の時間は自習だ!!エルフェに聞いて来い!!」

それでいいのか国語教師!?俺は心の中でそう叫ぶ。それが自分の得意科目の時間が消えた瞬間だった。

するとエルフェが困ってることに気が付いた先生は口を開く

「エルフェ。席は自由に座って構わない。開いている席に座ってくれ。」

先生がそう言った。その瞬間の出来事だった。

隣の席が空いている男子たちがエルフェの周りに囲いだす

「リーラちゃん!!僕の隣なんてどうかな?席が空いてるんだけど..」

「それなら俺の隣もどう?窓の近くで日当たりもいいよ」

「それなら俺の..」「オレの..」「僕の..」

とまあ、テンプレとも思うような現状を目の当たりにしながら寝ようと手を机に敷く。

「ヒッキー!!!さつきのはどういう事!?!なんでリーラちゃんはヒッキーに抱き着いたの!!!」

「どうして!!」

だが寝かせてくれないのが理不尽なところだと思ふ。由比ヶ浜が俺の前で騒ぐ。

「うるさい。あと、俺も知らん。抱き着く抱き着かないはもう関係ないだろ?」

「関係あるよ!!ありまくるよ!!!……………」

オギャオギャーと騒ぎまくる由比ヶ浜。

まあいいや無視しようかと少し考えていると隣に誰かが座った。

たしかに俺の隣の席も開いてはいたが…と目を向かせると

「さっきぶりです♪ハチ君」

俺の隣にエルフェが座っていた。

前でさわいでいた由比ヶ浜がもエルフェを見て目を大きくする。

「あ、あのおく?リーラちゃん?開いてる席はたくさんあるでしょ?なんでヒツキーの隣なのかな?」

隣なのかな?」

そう由比ヶ浜はエルフェに聞いた。するとエルフェの頭にハテナマークが浮かぶ。

「ヒツキー?ハチ君の事ですか?すいません。こういうあだ名っていう文化に疎くて。」

というエルフェ。一応君のその「ハチ君」って奴もあだ名なのだが…それは?

「ああ、大丈夫大丈夫。ヒツキーってわかりづらいよね?ごめんね。」

由比ヶ浜は手を合わせ謝るポーズをとる。

忘れてるんじゃないだろうか？と少し不安になったがエルフェの方から話してくれた。

「実はハチ君とは幼馴染でして…」

「そ、そうなんだ〜」

チラツとこつちを見る由比ヶ浜。『やっぱり嘘だったんだね？』と目で訴えかけてくる。

『いや、知らん。今初めて知った』と俺は反論するが少し焦っている。

「にして由比ヶ浜さんとハチ君って仲が良いんですね。」

「え？… あ、うん。同じ部活に入ってるからね」

由比ヶ浜が少し焦っている。

「へえ、あのハチ君が部活に入るとは… どんな部活なんですか？」

「奉仕部って言うてね。釣り人に魚を取ってあげるんじゃないかって取り方を教える部活だっ」

待てい!! 由比ヶ浜それではただの釣り同好会になつちやうよ!?!と俺は目で訴える  
が気が付いていない模様

「釣り…？ですか…」

ほらあ、言ったじゃん釣り同好会になるって。そう思うと俺は口を挟む。



「一応言っておくが。違うからな。コイツの表現が残念過ぎるだけだから。まあ、言わば何でも屋つてところだ」

「へえ、何でも屋ですか…。面白そうですね!!」

エルフェが目をキラキラさせている。自分で言うのもなんだがそんな楽し気な部活ではないのだが

「じゃあ、リーラちゃん。放課後一緒に行こうよ!!」

と由比ヶ浜は提案をする。別に損はないと思うし大丈夫だろうが…

「えっと…。はい分かりました。放課後ですね」

と、当のエルフェは少し迷っていたが行く事に決めた模様。

すると、由比ヶ浜はうっしと手で拳を作る。まあ人数が少なかつたからな。

「そういうええ。リーラちゃん。ヒツキーに抱き着いていたけどどうしてなの?」  
思い出したように由比ヶ浜は口にする。

別に俺としてはどうでもいいのだが少しは気になっていたことだった。

すると、エルフェは顔を赤くする。やはり恥ずかしかつたようだ

「え、えっと、あ、あのお…。そのお…。は、」

何かはつきりしない。由比ヶ浜はそんなにぼそぼそと呟いているエルフェ肩ゆらし

ながら

「ねえ、おしえてよ、ねえ」

と言う。うん、あれやられたらウザイ。

するとやつとエルフェが口を開いてくれた。

「は、は、は、ハチ君との約束……」

約束……？俺が約束？

と少し思い出そうとするが。第一彼女の事を思い出せない以上彼女の約束を思い出すもくそもあつたもんじゃない。

するとまた口を開いた

「け、結婚の約束……」

——そして、また教室が静かになった。

嫉妬の炎を残して

# Re : make !! 3話 : 兎にも角にも

「け、結婚……………?」

由比ヶ浜が小さく呟く。

盗み聞きしていた。教室の皆はあり得ない物を見るようにエルフェを見ていた。

そうだろう、何せ学校一の嫌われ者。及びボツチだそうなるのは当たり前だ。

するとその内の一人の女子が口を開く

「そ、それ本気?」

たった一言。たった一言エルフェに尋ねる。それは色んな意味を持っていることが誰にでも伝わった。

その女子の俺への評価も。振り返ったエルフェは少し貯めて言う

「……………本気とは?」

質問を質問で返す。

ホントはそれは日本語としてはやってはいけない行為。だが咎める人間は居なかった。咎める必要もなかった。

その言葉にさつきまで感じられなかった怒りや恐怖を感じる。それは逆に答えと

なっていた。

——この娘、本気だ。

「本気って：。だつてヒキタニだよ？なんで貴方みたいな有名な美人がそんな奴が好きな訳？おかしいでしょ？」

全くもつて同感。いや、それが当然の反応だ。

しかし当然過ぎてその娘は気づいてなかった。これ以上進んではいけないという事を、なによりそれ気付かなくてはならない存在が気付いてないのだ。当然雲行きは怪しくなるし。空気が濃くなっていく。

これ以上話が続くと危ない。

その瞬間ドアが開く音が聞こえてくる。

「おい、チャイム聞こえなかったのか？自習と言つても授業は授業だ席につけ」

この時、ほとんどの生徒が平塚先生に感謝を示した。

☆☆☆

昼休み。

俺はいつも道り、ベストプレイスに足を運ぶ。なにより今日半日すごく色濃かつたのだ。昼くらいは一人で居たい。それにこんな場所にはいくら何でも誰も居ないだろう。そう思いつつも座っている場所に目を配る。

「お久しぶりです。ハチ君。」

ポツンと。そこにはリーラ・エルフェが座っていた。

「は……？」

一人絶句する。誰も居ないはずの我が領土に他者がいつの間にか入り込んでいた心境だ。

「エルフェ……なんでここを知ってたよ？」

少し気力を取り戻しながらも質問するとエルフェは親指と人差し指で円を造る。金か!? 金なのか!?!?

「なんて冗談ですよ。ただ、なんとなくここに来るだろうなと思っただけです。」

「なんでだよ? 俺の性格を熟知してんのか? いや、それはそれで怖いが……」

そういうと俺はエルフェから少しはなれた一に座り。パンを開ける。

マツカンはこの時期になると温かいから外で昼をとる俺としてはうれしい次第だ。

「なんでそんなに離れた位置に座ってるんですか?」

少したつてからエルフェがそう聞く。何やら寂しいらしい。隣をポンポンと叩きながらこつちを睨みつける。

「うん? ……いや無理だろ。俺みたいなやつがお前みたいな美少女の隣に座るとか……レベルが高すぎる……」

「そんなことないですよ。はあ……もう、私からそっちに行きますね」

そういうエルフェは小さな弁当と水筒を持ち、俺の隣に座る。

俺はパンとマツカンを持って移動しようと立ち上がろうとするが、エルフェの視線が痛い。睨みつけているみたいだ……

はあ、諦めるしかないな。俺はパンとマツカンを置いた。

「うん、良い判断です。世の中諦めも大事ですよ。」

諦めさせた張本人が何を言うか。俺は彼女に目を配る。

まあ、最も諦めた本人が一番の加害者ではあるが……ああ、もう言い訳はよそう。俺は負けたんだ。結論、全部俺が悪いと。

「で？何の用だ？こんな場所まで追いかけてきて……それに結婚ってなんだよ？俺は聞いてないぞ？」

俺は今まで疑問になっていたことを彼女に聞き出す。もともと、今日帰っているであろう母親に聞けばいい話なのだが……それでもなるべくなら早く答えが欲しい

「ん？……あれ？覚えてないんですか？あの約束を……」

弁当を食べながらエルフェは驚いた顔をして俺を見上げる。

特に昔の特別な思い出は無かったはず。あつたとしてもいじめられていたという事くらいで、そんな約束はした覚えも全くない。

「悪いが何にも覚えがない。大体いつくらいの話なんだ？」

「ええつと、多分小学3年生ごろかと。」

小学三年か…… ああ、なにも思い出せない……

俺は軽く頭を抱える。するとエルフェは急接近してきた。顔が近い

「思い出せませんか？…… 何にも？」

少し声が小さくなっている…… 不安そうだ

「ああ、すまん。思い出せん」

「そう、ですか……」

目に見えて落ち込んでいる。そりやそうだ、大切な約束をした本人が忘れているのだ。誰だつて怒りたくもなるし泣きたくもなる。

「すまないな。俺だつて思い出せるのなら思い出したのは山々なんだがな……」

第一この子の事を何も知らない自分。要すると女優だったこと以外彼女の事は何も知らない。そう、どんなものが好きなのかもどんなものが嫌いなのかも何も知らないのだ。

——何と言うか…… 悔しい。彼女は俺の事をよく知つていふというのに……

俺は何も知らない。いわば不平等だ。

「良いんですよ…… そんな昔の事覚えてるわけじゃないですよね…… ハハハ……」

彼女の空笑いが空を切る。

そこには感情がこもっていない。いや、籠っているは籠っている。『一人で何を盛り上がったいたんだろう』という絶望。本当にそれしかないそれ以外なのだ。

じゃあ、これから俺は何をする？何を成してこの状況を打破する？

俺は口を開く

「じゃ、じゃあ、今からだ…」

「……え？」

「今から、お前の事を教えてくれ。俺はそれを覚えよう。絶対に忘れない。結婚等は置いておいて。俺はお前について知りたいんだよ。」

俺は言ってから自分がどんな恥ずかしい事を言ってるかを確認する。ヤバいかなり恥ずかしい。

でも今はそんな場合ではなかった。とにかく話を続ける

「じ、じゃあ、とにかく好きな物から教えてくれ」

「え、えつと、す、好きな物はですね——」

俺たちは暫くの間。自己紹介を含めた二人だけの交流会を行っていた。



別に彼女と付き合う気も何もないが兎に角自分の事彼女の事を知ってほしい知りたかった。

まあ、ここで思う事はただ一つ読者様。分かりますよね？

『とにかくりア充爆破しろ』

と、そんな目で彼らを見ていた非リア充共が居たとかいなかったとか…

## Re : make !! 4話 : 恐怖を感じて

放課後。

いつも通り部室に向かおうと鞆を手に取り立ち上がる。別段何かに依頼がある訳ではないだろうしそんなの滅多にある訳もない。ただこれが俺の生活の一部になっているのはもう分かり切っていることだった。ここまで来たら強制入部等にはもう関係ない。ただ自分の為に行っているようなものである。それに関しては平塚先生には頭が上がらない。

そう俺は心の中で平塚先生に感謝する。何かと今日は先生に感謝を示すことが多いな。

「すみません、ハチ君」

誰かが鞆を持っていた手を掴む。俺はその方向に目を配る。やはりエルフェだ。

「どうしたんだ?」

俺は尋ねる。何か困ったことがあるのだろうか。すると、彼女は困ったように言う

「実は由比ヶ浜さんがお友達に遊びに誘われたそうなんですけど断り切れなかったそうで……それで……」

「ああ、つまり。部屋に行きたいが場所が分からないと?」

そう言うのと彼女は首を縦に振る。まったく、由比ヶ浜の奴。自分で言ったのなら最後まで突き通せよな。俺はそう内心毒づく。まあ、別にいいんだけども

「分かった。着いて来てくれ案内する。」

「ありがとうございませす!!」

次の瞬間彼女は感謝のあまり俺の手を握る。その瞬間一気に周りの視線が一気に集まった。その視線は大体興味心、大部分嫉妬および妬みである。

やめて!!俺を見ないで!!俺が何をした!!?悪いのはこの世の中だろ!!てかおい材木座あ!!何外から敵意を刺しながらこつち見てんだよ!!助ける。主に俺を!!

何の関係もない材木座に後で当たることにした八幡であった。

「じゃあ、行きましよう?部屋」

彼女はなんの関係も無さげに話しかけてくる。いい加減この惨状に目を向けてくださいお願いします。

「あ、ああ、そ、そうだな...」

言えるわけもなくただとりあえず俺は部屋に向かう事にした.....彼女と手をつないで.....

## ☆☆☆

「はい、ですか？」

何かとシールが張つてある教室の名札を眺めるエルフェ。もちろんシールがあるだけで名刺には教室名はない。彼女はなんとなく。しかし確実にそこを当てた。

「…… 良く分かったな。ここが奉仕部部室だつて」

「やっぱり。なんかここだけ少し雰囲気の違いでしたから。」

雰囲気か…… たしかに何も無い教室が続くなかポツンと人気のある教室。異端だ。

「…… まあ、ぼちぼち入りますかね」

俺は覚悟を決める。このまま、俺が部室に入ったら確実に不審者扱いだろう。あの毒舌部長がこの状況をネタにしないわけがない。ソースは俺

なにもしないのは出来ないことの理由にはならない俺はとりあえず部室の扉を開ける。(ただ何となくそれっぽく仮面○イダーネタがやりたかつた行)

扉を開けるとやはり「雪ノ下雪乃」が奥の席にただ一人座っていた。本に向き合つてただ次のページを待ち望みそれを待っている。

するとすぐにこつちに気付く雪ノ下。まあ、気付かなければ呼んでいたが。すると彼女は口を開く

「あら？遅かったわね？遅ケ谷く……………キヤア!!??」

……………きやあ？言葉で話は途切れ何かに怯えてるように叫び声をあげる雪ノ下。

「え、エルフェさん??ど、どうしてここに?????」

え？雪ノ下？なんでエルフェの名を？

「あれ？雪ノ下さん？お久しぶりです!!」

嬉しそうに雪ノ下の名前を呼ぶエルフェ。ここで互いの反応の違いに違和感を感じる。怯える雪ノ下と愉快そうなエルフェ全く真反対だ。

「お、お久しぶりね？え、え、エルフェさん」

この二人の間に何かあったのだろうか。心配になってきた。あと、雪ノ下。声が震えてるぞ？大丈夫か？

俺はとりあえず震える雪ノ下に話しかける事にした。

「お前エルフェと知り合いなのか？」

「え、ええ、知り合いと言えば知り合いね。昔から彼女の家のパーティーによく御呼ばれされてたから。」

なんとも世間は狭い。まさか有名人と知り合いな奴が俺の近くにいたとは……………まあ、俺も言えた義理ではないが。するとエルフェは雪ノ下に抱き着く。別に百合と言うつもりはないが……………雪ノ下さん最近そんなシーン多めじゃありませんかね？

「ど、どうしたのかしら？エルフェさん？」

「いやあくやつぱり雪ノ下さんの匂いは落ち着くなくって思いました。」

「やばい。ヤバイよ!!由比ヶ浜!!雪ノ下取られてるよ!!取られるよ!!(大事な事なので二回言う精神)」

しかし、ここまで仲がよきそうな二人なのに何故雪ノ下は怯えてるんだ？実質俺が聞く理由はないが何かと気になる。

「あ、ごめなさい雪ノ下さんハチ君。ちよつとお手洗いに行つてきます」

いいタイミングでトイレに行つてくれるらしい。このチャンスを逃す手はない。

「あ、ああ。場所は分かるな？」

「ええ、分かっていますよ。じゃあ行つてきます」

そう言つて部室を後にするエルフェ。では質問Timeと行きますか。

俺は雪ノ下の方向に向きなおす。すると向こうから話しかけてきた

「比企谷君。今日まさかエルフェさんを怒らせるような事してないわよね？」

「ん？ああ、まあ、そういう教室の女子が怒らせかけたが……どうした？」

すると雪ノ下は青い顔になりかけるが。少し立ち止まる。何故か不安になるからやめてそう言うの。

「そ、それならいいのだけでも……」

「……何かあったのか？」

俺がそう言うのと部屋は音を失う。

雪ノ下はまだ少し怯えているらしい。すると雪ノ下は話を始めた。

「2年前の事だったわ。私は毎年の通り彼女のパーティーに御呼ばれされてアメリカまで足を運んだの。姉さんも丁度アメリカに用があったから一緒に行ったのだけれども。その時はエルフェさんの誕生パーティーで色んな有名な有名人が来ていたの。」

澁々と話していく雪ノ下。なかなか深い仲だったらしい。

「それで普通にエルフェさんと話しをしていたのだけれども。その時だった、私たちに話しかけてきた男がいたの。確か名前はゴードンだったか、ゴリラだったか……」

コイツその男に結構恨みがあるな？

「まあいいわ。とりあえずその男はかなりのロリコンで。いきなりエルフェさんに結婚を前提に付き合ってくれと言ったのよ。それが問題だった。」

なんとなく察してきた。俺は耳を貸す。

「彼女は結婚を約束している人が居るから駄目だと言っただけけれども、彼は無理矢理話を進めようとして彼女の肩に手を掛けたの……そしたら」

すると雪ノ下は顔を青くする。

「……めんなさい。少し吐き気を催しただけだから……話はもういいかしら？すこし

体調がすぐれなくて……」

感じる。雪ノ下から哀愁と絶望そして恐怖を。旨い怪談を聞かされているようだ。いや。もつと質の悪い何かを。

「すいません。遅れました」

「ひい!!」

奉仕部のドアが開く音とともに俺たちは声をあげてしまう。

少なくとも今は目の前の少女がとてつもなく大きな悪魔および死神に見える。とくにその綺麗な白い髪がそれです。

「どうしたんですか?」

エルフェはそう聞く。死刑宣告か? 殺す気なの? 俺たちを? どんなえぐいやり方で?  
?

「あ、もしかして……二人とも付き合つてると「いや、それは無いです」……そうですか……」

即座に否定する。

絶対ないこんな毒舌女とは。



「じゃあ、なんでs 「そう言えばもう時間ね。帰りましょう？エルフェさん比企谷君」  
なんか部長が凄く頼りになると思った瞬間であつた。  
俺はエルフェを連れて帰ることにした。

あれ？エルフェって今どこに住んでんだ？

## Re : make !! 5話 : 曰く

部活も終わり。片付けも一通り終わった。言っても俺は何もしていないが…  
鍵を閉め。帰路に着こうと玄関に向かう。

「じゃあ、私は先生にカギを返しに行くから。さようなら」

雪ノ下のカギを持って言う。

「ああ、じゃあな」

「はい、さようなら」

各自で雪ノ下に挨拶を言い。自身の帰路に向かおうと玄関に立った時だった。

暫くしてエルフェがポケットに入っていた紙を見せて言う。

「すみませんハチ君。ここ、わかりますか？なんでも、この住所の場所がホームステイ先  
だそうなので。」

「ホームステイ？お前引越してきたんじゃないのか？」

「いやあ、ほんの少しの間なんですけど。私一応留学生ってことになってるらしく  
て…」

へくそうなんだ。うなずきながらメモを覗き見る。どこかで見た住所だ。しかし、思

い出せない。

自身の住所ですら分からない俺だぞ？他人の住所なんかわかるかよ。（どうやって高校行つたんだよ…）

ちと、愚痴りながらその書かれている方を向く。

「はあ…… 仕方ないか……俺が連れてってやるよ。」

溜息をつきながら言う。本当にめんどくさいが……本とうに!!めんどくさいが「ホントですか?!?!ありがとうございます!!」

またもや感謝のあまり手を握る。止めるよ、エルフェ。勘違いするだろ？

ふと悪態を着くと。俺は手を向ける。

「じゃあ、ついてこい。まあ、言うて俺も分からんがな。」

そう言うのと俺は、あまり自身なさげに自転車を手持ちながら歩き出す。校門を抜け信号を渡りメモ通り歩き進める。その間二人とも何も言わないし何も喋る気配もない。

するとエルフェは真面目にメモを見る俺に対して質問をする。

「ねえハチ君。どうしてそこまでしてくれるんですか？」

「ああ……？仮にも頼まれた身だからな。それをないがしろにしたら後々気持ち悪くなるのは俺だからな。まあ、自己満足って奴だ。気にすんな。」

俺がそう言うのとエルフェは不思議そうに俺の顔を覗き見る。

「……………」

「な、なんだよ？」

「いえ、ただ何となく。やっぱりハチ君だなあつて」

「ああ？何だよそれ…。」

するとエルフェはフフと笑い。また歩き出す。なにか知らんが嬉しそうだな。そして俺はメモに目を戻す。

そう言えば、この道どこかで… いや、そんなことが…

一瞬頭によぎった可能性を否定する。いや、したい。

「にしても、まだ付かないんですか？」

「ああ、もう少しのはずなんだがな……………ん？」

やはり違和感。周りには見慣れた景色が広がっている。

住所まんまの場所には見覚えのある青っぽい屋根。見覚えつてか覚えがあり過ぎるいわく表札。とても普通で何も無いはずの一軒家に目が映る。

「うん？どうしたんですか…？」

エルフェは何も知らずに俺に質問をする。此処は何処なのだ…

まさか、まさかと思っていたが… まさか…

「あれえく？お兄ちゃん今日帰るの早くない？てか、隣の人だれ？」

聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「こ、小町……」

ふと、呼び主名前を言う。

すると、エルフェは気になったように俺に話しかけてきた。

「……ハチ君の妹さんですか？」

「え？ああ、妹の小町だ。小町、転校生のリーラ・エルフェだ。」

俺がそう紹介すると小町は目を大きくして驚く。

「り、り、り、リーラ・エルフェさんって!!ゆ、有名なハリウッド女優じゃん!!な、なん

で此処に!!??」

大げさな程にビビってる。

そう言えば、コイツが見てる映画って大体海外映画だったな。

「り、リーラ・エルフェさん!!ファンです!!特に『リア充爆発しろ』は最高でした!!」

何?!そんな映画あんの？

あまりの映画のネーミングセンスの悪さに流石の俺もビビる……いや、ああそう

か、日本のネーミングセンスの悪さは国内でも評判だから……とりあえず、スパ○

ダーマンはああならなくてよかった。

「え？あ、ありがとうございます。それは私の初主演の映画ですね。ちよつとすぐに出てこなくて……すいません」

「いえいえ、仕方ない事ですよ。」

小町は笑いながらそう返す。

「そういえばお兄ちゃんどうしたの？こんなところに突っ立ってて」

さつきまでエルフェと仲良く話していたのに急にこつちを見る。小町。

「いやな、エルフェのホームステイ場所探してるんだが……なんか歩いてたら此処に着いちまってな」

「ああ、そう言えば。今朝お母さんがホームステイの子が今日来るって言ってたけど。」

「え、そんな話聞いてない。」

「ああ……… (▽、\*ゞ) テヘツ」

ホント、イラつくなこのマセガキ。

「とりあえず入ろうよ、ほら、リーラさんも。」

「え、あ、はい」

はあ、仕方ない……あれ？もしかして朝の母さんのあれって……

梅雨もないような事を考える八幡だった。後にこれをリーラの咆哮と呼ばれるとは誰にも予想できなかったという。まあ嘘なんだけど。

## Re : make !! 6 話 : 了解と睡眠と珈琲

ホームステイ——人はそれを勉強と揶揄する（実際そうなのだが）。

たしかにしてみれば英語などの上達スピードも上がるだろう、その国の文化や風習なども知ることも出来るだろう：

しかし、そこで問題となるのは“人間関係” 人間とは醜いものでそれは何処へ行こうとどこを見ようと垣間見れてしまう。

中学の英語の教科書を覚えてるだろうか。そこに確かホームステイについての話が軽く乗っていたと思う。そこになんて書いてあったか：いまだに覚えてるだろうか。（直訳）「ホストマザーがウザイ」「ホストファミリーに気を遣うの疲れる」「なんでホストなんですか？」

はい、学校の教科書なのに愚痴にしか聞こえないのはなぜだろうか。そもそもそこまでのデメリットを背負っていく意味などあるのだろうか。

と、前置きはここまでにして

そんなデメリットを背負って家にホームステイをしたい（しなければならぬ）という少女が現れたら君はどうするだろうか。

俺?…そりやあもちろん

「反対だ」

「なんでよお? 良いじゃない別に」

母さんは面白くなさそうにそう返す。

「なんでもクソもあるか、若い男女が同じ屋根の下で生活するなんざ容認できるか。」

「彼女だつて好きで此処に来てるんじゃないのよ? 家がまだないから、仕方なく仕方なくここに居るのよ? それを反対なんてするもんじゃないと思うけど?」

「知るか!…とは言えんが、金なら俺の金使つてもいいつて言つてるだろ? それにエルフェだつてこんな小汚い家に泊まりたくないと思うし。それに母さん、育ち盛りな子供を二人も抱えてるのにまた一人つてそれを抱えるだけの財力が家にあると?」

会心の一撃、これだけはどうにも母さんだけでは言い返せないだろう

「ぐつ、さすがは父さんの子…口だけは達者のようね…」

ふつ、諦めたようだ。少し体を和ませる。



「けど、甘いわね!!この子の母親に生活費くらいは頂いたわ!!」

「な、なに!!」

母が出してきた通帳を凝視すると0が3つ増えていることに気が付く。

「ば、バカなっ?!?あの赤字寸前だった通帳には見えん?!」

がつつり黒字どころか軽い金持ちになってしまったようだ。

「ホオ〜ホホホ!!お小遣いが欲しければ跪きなさい?」

「おい、生活費を無駄にすんな」

調子に乗っている母さんに一喝すると話を戻す。

「くっそ、貰っちゃまったもんは仕方ないし……仕方ない家が見つかるまでだからな、」

俺がそう言うのとエルフェは嬉しそうに「はい!!」と返した。その雰囲気はまたも可愛

らしい

「なあ〜に?八幡ニヤケちやつて〜」

「んなっ?!にやけてない!!」

やばい、顔に出ていたか…はあ、これからの生活が思いやられるな…

ふと、俺は窓から月を見上げた。

☆☆☆

「ふむ……」

朝5時ごろ、俗にいう朝早く俺は何気なく目が覚めた。いつも時間ギリギリだったところなのに今日ばかりは早起きになっていた。何故かって理由はまあ、なんとなく察しがついているだろうが昨日から家にホームステイすることになったエルフェがその理由とやらだろう。

言っても同い年のしかも女子が同じ家に居るのだ、そりやあそうなる。しかもとどめに元女優つてのは最悪も最悪。死ぬわ、主に俺のメンタルが。そろそろ起きよう。久しぶりに朝飯でも作ってみようかな。

「……………I love……………」

「……………タイム。」

少し待ってくれ…隣から声が漏れてきた気がするのだが。

そんなでもって何か威圧を感じる。多分これは席が隣になった女子が無意識に放つてくる特有のあれのようだが…

「いや、まさか…あり得ないだろう?」

隣の少し膨れた布団を凝視する…これは…ラノベとかによくあるあれか?なに?俺いつの間に大人の階段上つてたの?

すこし布団から白い髪がはみ出ている…うん、家に居る白い髪の女って…ふう、落

ち着けよ、落ち着け……？おーけー？

さて、起こそうか。

「おい、起きろよ。エルフェなんで此処で寝てるんだ？」

俺は勢い良く膨れた布団をめくる。やはり、昨日からうちに来たリーラ・エルフェだった。

「う……ん？……は、ちくん？なんでここに……いつ!？」

やっと目が覚めたようだ、彼女は驚きのあまりベットからずり落ちた。なんとも締まらない。

「大丈夫か？」

「え、は、はい。でもなんで私ここに……って、ここ八くんの部屋じゃないですか!!」  
彼女も驚いたような姿勢をとる、やはり彼女もワザとって訳じゃないらしい。少し安心した、エルフェがもし、いきなり人の布団に入り込んでくるようなビツチだと思わなくて済む。

「ああ／／／昨日一晩八くんと同じベットで寝ていたって事ですか／／／そういう事ならもうちよつと早く起きたかったな八くんの寝顔……」

ブツブツと独り言をしゃべっているエルフェ

「あ、あのお、いい加減退いて頂けないですかねえ？そのね？色々almazというか…」  
そう俺が言うのとエルフェは顔を真っ赤にして退いてくれた。  
ふう……これからが思いやられるな…

☆☆☆

「ごめんね！昨日いっしょに行けなくて」

ホームルーム前の暇な時間、由比ヶ浜がエルフェに謝っている光景が横目に見えた。  
まあ、昨日いきなり友達と遊びに行くからと言って約束していた物を断ってしまったんだ仕方が有るまい。

「今度から気を付けてくれれば大丈夫ですよ」

エルフェはニコリと笑いながら言う。もう少し怒っても良いと思うんだけどな。

「いや、それじゃ申し訳がたないよ。後でジュース奢るよ。何がいい？」  
そうエルフェに聞く由比ヶ浜、基本由比ヶ浜は優しい。だからこの事をずっと気にしてたのだろうと勘ぐりを入れる。するとエルフェがその問いに返す

「うーん、じゃあ。マックスコーヒー？」

「……………っ!?」

その答えに隣にいた、俺でさえ息を飲んだ。

つまりだ、このご令嬢は自分からイバラの道（最強の甘党）を目指すと言ったのだ。しかもかなり極端に好き嫌いが分かれるマックスコーヒーを初戦に選んだ。やはりこの娘正気じゃないのかも知れない。

「お、おい、いきなりマックスコーヒーを選ぶのか？」

「え?…ええ、」

「や、やめておいた方がいいんじゃないのかな?あまりいきなりそういうのは」

由比ヶ浜が言うのを荒げてエルフェは言った。

「いえ!八くんが好きな物を私も好きになりたいんです!」

天使が見えた。

なんか羽が生えてるように見える!くっそ、なんかお小遣いあげたい気分になっちゃったぞ!!

現にとなりで由比ヶ浜も財布に手をだして……………っておい!3万!?幾ら何でも…マ

ジで？

「はっ？……じゃ、じゃあマックスコーヒーだね？うん分かったよ」

途中で気がついていたらしい、金を財布に入れなおし席に着く。これがスターのオーラって奴か……少々ハリウッドが怖くなった。金が無くなる。

☆エルフェの初めてのマックスコーヒー。ダイジエスト

「甘っ!?!……で、でもなんかす、す、好きかも」

「嘘付くな、嘘を。」

「あはは……やっぱりそうなるよね。」

## Re : make!! 7話 : アヒル、お昼

4時間目の終了のチャイムが響き、授業が終わる。

やっと昼休み、ただこれを楽しみに学校にきてる気がする。まあ割に会ってないんだが、そんな事を思いながら俺は購買に行くために財布を握った。

「エルフェさん、お昼ご飯一緒にどうだい？」

瞬間、ふと隣からイケメン野郎のいけすました顔が視界に入る。

葉山か…

そういえば此奴エルフェが転入してから一度もエルフェに話しかけた覚えが無かった。転入生なんか来たら一番に話しかけて来そうな感じなのに、なぜ今更？

「え、えつとく……」

エルフェは困っている。チラツチラツとこちらを見ては何かを望んでいる様だった。

——俺の事は気にすんな、行きたいんなら行け。

アイコンタクトでそう言うのとエルフェは諦めた様に頷く。

何だろうかアイコンタクトでここまで意味が通じ会うとは思はなかった。自分のあいつへの信頼度の高さが伺える。

「…分かりました。良いですよ」

「じゃあ決まりだね由美子、みんな、エルフェさんも一緒にいいかい？」

「いいよ、うち丁度エルフェさんと話したいと思ってたし」

「私もいいよー」

そうそれぞれが返すとエルフェは由比ヶ浜の席の近くに座った。

まあ由比ヶ浜も居るしあんまり心配する必要は無いかな？

そう思うと俺は購買に向う。あ、やばいもう売り切るてるかも

☆☆☆

結果、無事パンを入手する事が出来た。やはりコンビニなどで買える物くらいしか無いがそれでも無いだけマシだろう

パン片手にマイベストプレイスに居座る。いつもはそこにエルフェがいるのだが今



日は居ないのでいつもより隣が広くなった感じがする。あれから十数分が経った。まあ何ごとも無いって事は大丈夫なんだろう。

正直彼女が隣に居なくて寂しいという気持ちはない。寧ろ安心した。ボツチの俺ばかり相手にしていたらあいつのカーズトが下がる一方だったからな。丁度いいタイミングできてくれたとあのイケメンに言ってやらんでも無いまである。でもまあ、なんだかやはり隣が寂しい感じが否めないのも確か。なんだかんだ言って俺は寂しいんだなって思う。

「寂しい……か」

久々にそんな気持ちになった。

中学生の頃は一度もそんな事を感じた事は無かった。たしか最後にそんな事を感じたのは……………。

「ああ、そうか、そうだった」

あの娘が転校した時だった。

あの娘が転校してその次の日もこんな気持ちだった気がする。たしかその後一回も会ってないんだっけ。たしか名前は…

あれ?……

「……何がそうだったんですか?」

ふと、いつも聞いた声が聞こえた。

ふわっと白い髪が目の前を通りすぎる。

一瞬、その青い瞳に見惚れた。

そして輪郭に懐かしさを覚えた。

「……………リーちゃん」

そう、つい何気なく発した言葉に俺は違和感をもてなかった。  
するとエルフェは目を大きく開き驚く。

「思い……出したんですか……?」

そう聞かれる。少し涙が出ている様子だ。

「いや違う、ちよつと名前が出てきただけだ。」

「そう、ですか。でも名前が出てきたって事はハチくんはやはりはちくんだったって事ですよね?」

そう聞かれると俺は少しもごるが、まあそれしか無いと言わざる得ないほどにその部分的な記憶はハッキリしていた。だがここでそれを言う訳にもいかず

「し、知らん」

と一言言うしか無かった。

でもエルフェの顔は確信に満ちていた。

「そ、そういうえばエルフェ。葉山たちと食べるんじや無かったのか?」

「いやあ、やつぱりこの方が安心しますからね。何せはちくんの隣ですから。」

「いや、その方が不安しかないとと思うが、むしろ葉山たちの方が…」

良いと言おうと思ったがやめる。

するとエルフェは能弁になって語ってきた。

「だってあの人たち(男限定)色眼鏡で私を見てくる様な人たちがばかりですよ? 長年ああいう仕事をやっているとなるとそういう目にも慣れてくるものですが。でもやつぱり嫌なものは嫌ですから」

そういうとら彼女は隣に腰を掛けた。

「それと一つ怒っていることがあります。」

「何？」

「なんで葉山くんが話しかけた時私を連れ出してくれなかったんですか！」

「ええ……」

「私！貴方がきつと連れ出してくれてくれるって信じてたんですよ!!なのになんで！いきなりアイコンタクトで行けみたいなこと言うんですか！私の方が引けなくなっちゃったじゃないですか！」

ええ、理不尽。

エルフェはぶんぶんと怒りながら俺を見ているが、いやすまん、怖くない、むしろスツゲーかわいいです……

「まったく………ん？由比ヶ浜さん？」

エルフェは俺の向こう側を見ながら言う。俺も振り返ると其処には由比ヶ浜が申し訳なさそうにこつちに歩いてくるのがわかる。

「リーラちゃん、ごめんね。なんか嫌な気分にしたみたいで」

「いえいえ、ただ私がハチくんと一緒に居たかっただけですから」

「でも………」

「由比ヶ浜さんが気に病む必要は無いですよ。ただあのグループが私に合わなかっただ

けで」

「……うくんわかったよ。ごめんね変な気を使わせちゃって」

そう言うのと由比ヶ浜は手を振って離れてった。あれは…奉仕部の方面か。雪ノ下はいつも休み時間はあそこに居るからな。用でもあるんだろう

「由比ヶ浜さん雪ノ下さんとすぐく仲が良いですよね」

「まあ、そうだな。部活の時のあの接近度はヤバイ」

放課後の百合百合とした場面を思い出す。

「羨ましいなあ〜」

ん？何を言った？この娘？

「羨ましくくないですか？あんなに仲いいの」

「いやまで、あのレベルがか？」

「はい、っていう事で雪ノ下さんと由比ヶ浜さんの所へ行つてきまーす  
なんの躊躇もなくエルフェは走り出して逝った。

はあ、今日もいい天気だな。

## Re : make !! 8話 : ゲームと日常

5分ほど前。

最近始めた某スマホゲーでせっせと集めた宝石を全部ガチャに回しました。ただおっぱいが大きくて可愛い女の子が欲しかっただけなのに

大爆死しました。

これだけでも死にたいのに

その時にエルフェが来て「ふえ!? どうしたんですか!! 目が目がいつも以上に腐ってますよ!! え、キモっ」と言われ。

妹には「何? ガチャで爆死した? 何狙ってたの? ……え? キモっ」と言われました。

なんか心も体も限界らしいです。

「いやあくお兄ちゃんがそんなゲームにハマるなんてねえ。」

小町が言う。

「そうですね、まさかこんなに死んだ目してどんな悩み抱えてるんだろうと思ったらこれですからね」

エルフェが言う。

もう辞めてえ！八幡のライフはもうゼロよん！！

「にしてもどうしてそんなロリコンじみたゲーム始めたの？」

小町はどーでも良さそうに聞く。

そして俺は言う。

「始めは、材木座に勧められたからです。」

『八幡!!これ神ゲーだからやってみ、！まじハマるから!!』

って、その時の材木座は目が澄んでいてさ、いつもの中二病も抜けていた。

いや、俺だってこんなゲーム、最初はハマるなんて思わなかったさ。ただただ金をむしり取るだけの糞ゲーだろって正直そう思った。

なんとなく開いてみたら気づいたら総プレイ数20時間を切っていた。昨日入れたばつかなのにもかかわらず。」

死んだ目で言う。

「ガチャも全員俺好みの可愛い子が揃っていて。

強さ弱さ関係なく楽しんでいたしbgmも映える物ばかり絵も綺麗だし作り込みが半端じゃなかった。

ストーリーも感動爆笑喜怒哀楽が俺の中で区別しやすく楽しかったさ。

一つミッションをクリアすると次をやりたい次をやりたいう欲求にかられ

一つキャラが増えると次のレベルに上げたい次のレベルに上げたいって

いつの間にか泥沼状態片足どころか半水浴してました。

もうダメだやめようって思ってもスマホが手から離れてくれないんです。苦しくて苦しくて。

段々、ガチャの確定演出が出る時の感覚が忘れられて次に次につて」

「後半言ってることなんかやばいのやってる人みたい。」

「気づいたらこんな状態。」

「はっ、自分が惨めになってくるよ」

「大丈夫だよ！そんな惨めなお兄ちゃんでも小町絶対見捨てないから！

あ、今の小町的にポイント高い☆



惨めって、そこ認めちゃうんだ。

あとお兄ちゃん的にはポイント低いぞーそれ

「でも、このキャラほんとうにおっぱいが異常にでつかいねえ。ほんとバケモノ級」

こら小町ちゃん!? 何、人の推しキャラバケモノ呼ばわりしてるんですか!?! ほらエルフェだつて自分の胸見て意気消沈しちゃってるじゃない! 辞めなさい!

「うう、ヘンタイ!」

「ああーお兄ちゃんがリーラおねーちゃんを泣かせたー、いーけないんだーいけないんだーお母さんに言っちゃおー」

「辞めてえ!! マジで俺死ぬかも知れないからあ!!」

嗚呼、今日も家は賑やかです。

☆☆☆

『青春とは嘘であり悪である。』

そんな言葉から始まる作文が俺の元に帰ってきた。

これが俺が奉仕部に入ったキツカケでありこれが俺の苦勞の始まりだったと思う。書き直した作文には特に変な事は書かなかつた、と思う。先生にガン見されたけど。

まあ、一応思い出の品だし保存して置こう。

そう思いポケットに作文を詰め込む。なんだかぐしやぐしやになりそうだがこの作文が皆んなに見られる程恥ずかしい事はない。

しつかり隠さなくては

「あら？比企谷くんどうしたのかしら？気持ち悪い笑みを浮かべて…気持ち悪いわ」

雪ノ下？雪ノ下！

「ゆ、雪ノ下こそどうしたんだ？職員室に用なんて」

「？普通に部室の鍵を取りにきたのだけでも。」

やばいこいつにだけは見られたく無い。絶対に後で罵倒のネタにされる！！

「そ、そうかあ。ま、まあ俺も後で向かうよ、じゃあな！」

「へ？あ。わかつたわ？」

俺は教室に走った。

しばらく一本道を走っていると廊下を走らないでという張り紙があつたので歩き出す。さてここで抜ければもう少しで教室だ！

「あれ？ヒツキー？どうしたの？」

「俺は走り出した。」

あれれえ？おつかしいぞおろ？なんか偽な恋のヒロインみたいな声が聞こえたけど  
気の所為だよね、いつけね☆

「な、なんで無視するしいい!!」

後ろから由比ヶ浜が追いかけてくる。

ツチ（舌打ち）

騙されなかったか…

「なんか舌打ちされたし！」

「はあ、分かったよ。何の用だ？」

「無視の上に質問系!?!こつちが質問したんだけど！」

「いいからいいからTime is the moneyだぞ」

「た、たいむいずぎまねー？」

「あ、すまん日本語で時は金なりな」

「なんで日本語で言わないしいー」

いや普通に分かるだろ…大丈夫かなホント

そんなことを思っていると忘れた事を思い出す。

「まあ、あれだ。ただただ教室に用があるんだよ、」

「あ、そつかーごめんね？取り押さえて」

「あ、うん、じゃな！」

俺は教室に走った。

ただ作文を片付けたいが為に。

「あつれえーせんぱーい？」

ぐっ！また面倒いのが！こちらに気が付いた一色が走ってくる。

「せんぱい、なんでこんなところにいるんですか？まさか私のストーカーとか？」

「な訳ねーだろ。教室がここの目の前なの！わかる？パーデウン？」

「うわ、ウツザ。そんなだとモテませんよ。」

「モテなくて結構。俺は目が無ければ顔は整ってるし結構高スペックなんだよ」

「なんなんですか？この自信はどこからでるんでしょうね」

「うっせ」

「ま、いいや。で、それなんですか？」

一色は作文が入っているポケットを指差した。

いつもより少し浮いてるスボンに違和感を覚えたのだろう。……いやそこまでじゃなくね？

「え、えっと、これはだなあ、」

「まさかエツチな何かだったり？」

何を言い出してるんだろうこの子は。

煩惱たいさーん

「な訳ねーだろ」

「怪しいなあ、見せてください」

「嫌だね。俺の存亡に関わる」

「なおさら見せてくださいよー、気になって夜も眠れませんよ」

「いーやーだー、絶対！」

「えー、いいじゃないですかケチィー」

「ちよっ……やめっ!!」

次の瞬間だった。なにかが俺の前を通り、いつのまにか一色が倒れていた。

「おい！大丈夫か!!」

一色を抱き抱えると息はあつた。

が、何かが飛んできた方向からやばいオーラを感じる。

「フー…フー…やっと思つきましたよお会長」ゴゴ

俺はひつと小さく悲鳴を上げた。

ふ、副会長？こわっ!?

鬼の形相で一色を睨みつけていたのでついに俺は一色を手放した。

すると副会長は一色を引きずって生徒会室に向かつて行った。

アディオス、生徒会長。

さて俺もそろそろ行きますか。

俺は教室のドアをあけ席に着きカバンを開ける。

カバンの中にファイルが見つからないので

とりあえずプリントをいつも誰もいないとなりの席におきカバンを探る。

本当に次の瞬間だった。

「えっと、

『青春とは嘘であり、悪である。』

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き自らを取り巻く環境

を肯定的にとらえる。

彼らは青春の二文字の前ならば、どんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げてみせる。

彼らにかかれば嘘も秘密も罪科も失敗さえも、青春のスパイスではないのだ。

仮に失敗することが青春の証であるのなら友達作りに失敗した人間もまた青春のド真ん中でなければおかしいではないか。

しかし、彼らはそれを認めないだろう。

すべては彼らのご都合主義でしかない。結論を言おう。

青春を楽しむ愚か者ども、

砕け散れ。』

………何これ？」

そう、エルフェに音読された。

そうだったとなりの席今はエルフェがいるのでした忘れてた。完全なる自分のミスに恥ずかしくなってくる。

周りのみんななこれを聞いて肩をピクピクと揺らしながら笑うのを堪えている。

やばい恥つずい。

明日から不登校になろうかガチで考えた瞬間だった。



## Re : make !! 9 話 : 死スコン

「おはようございます……」

朝、いつもより遅い時間帯にエルフェが起きてきた。

なんとというか珍しい。いつもなら6時くらいには起きてリビングでコーヒーを飲みながらティータイムを楽しんでいるのに今日は。

嗚呼、なんでだろう？

機嫌悪いのかな？

さつきから一向に目を合わせてくれる様子はない。

てか明らかにそっぽ向いてるし……

そつと、小町の方をみるが、小町も良く分かっていない雰囲気だ。

「ど、どうしたの……？ リーラさん。なんか元気ないみたいですけど……」

小町がそう聞く。

するとエルフェがやつとこちらの方を向く。白い髪がシャツて、女の子はやっぱ口  
ングかな？ いやショートだろ！（作者論）

「い、……いや、ですね。あゝゝゝ!!」

いきなりテーブルに突つ伏すエルフェ、なんだか今日は俺より目が腐ってる気がする  
「どうしたんだ？相談があるなら乗るが……」

耐えかねた俺がそう言うのと少し顔を上げるエルフェ

「……昔からハチ君はそうですよね……困っている人を見ると放っておけないというか  
……そんなハチ君を私は好……」

「誤魔化そうとしてんじゃねーよ。さっさと吐いちまつた方が楽だぜ？」

「お兄ちゃん、女の子の告白を凄くスタイリッシュに避けたけど。やってること結構最低だよ？」

「知らねえよ。つて言ったら世界中の男子を敵に回すな……あれ？俺の足元地雷だらけ  
じゃね？むしろ現在進行形で地雷踏んでるよね？」

「いや、とつくの昔から爆発し続けてるでしょ、なんだっけ？転校の時にリーラさんに  
初っ端から抱きつかれたとか……その辺りから」

「え!?!もうあれ、一週間はたってるよ!?!よく俺、原型保てるな」

そんな他愛ない話をしてると

エルフェが何か羨ましそうな感じの目をしてこちらを見つめてる…なんかやり辛い

…

「やっぱり羨ましいなあ、妹とそんな感じに話が出るんなんて…」

「ん？お前妹居たっけ？」

「え？ええ、まあ」

おお、初めて聞いた。リメイク前は無かった設定だな。そう思いながら彼女をみると少し疲れていた。

「実はその子にちよつと問題がありました…」

「問題？」

「ええ、実は……」

ちよつと、死んだ目が腐っていつている

「じ、実は重度のシスコンなんです!!!」

.....  
お、おう？.....

「よ、よかつたじゃないか、俺もシスコンだから仲良くできそうだな！」

「そ、それならいいんですけど……あの娘極度の人見知りです……特に男の子への嫌悪は激しくて、最悪、ハチ君殺されるかもしれないですね」

なにそれ怖い、

「それにあの子ハチくんの事、ゴキブリより嫌いって言ってたから。……本当に……死ぬかも」

「ゴキっ!?!……」

なんか、俺が知らぬ間に俺アンチが増えてた件について……

「ドンマイ、お兄ちゃん……」

小町が肩をポンッと叩く

技：小町の肩ポン  
効果：虚しくなる。

80000のダメージ

八幡「ぐほっ!？」

ーはちまんは死んだーー

てれってってー

小町はレベルが2上がった。

「嬉しくないけどね」

はちまんの死骸の防御力が4減った。

「死骸でも防御力あるのかよ……」

……だが、合点が行かないな……何で今そんなに落ち込んでるんだ。落ち込む程じゃないだろ?……」

すると、エルフェはケータイを取り出した。



よあいにいくよあいにいくよあいにいくよあいにいくよあいにいくよあいにいくよあいにいくよ

あいにいくよ

—END—

「……………怖っ!?!」

現在進行形で鳥肌がたっている。

小町も目から涙が出ている。

「母から聞いたら明日来るって…もう不安しなくて…」

「いや、不安とかそう言うレベルじゃないでしょ! どうしてこんなになるまで放置してたの!?!」

「いや、だって。……………ねえ?」

「いや、『ねえ?』じゃなくて!」

「私だってよく分かんないですよ。ハチくんと遊びに行つて帰つてきたら急にベツタリでしたから」

……………え、

「え？俺のせい？」

小町は俺を親の仇の様に睨みつけた。

なんだか言われもない事で恨まれてるんだが…え？俺が悪いの？それ、

「あー、そうか、そう言えば、それからですねえ、男の人に嫌悪感を抱き出したの…」

……………小町よ、俺をそんなクズを見る目で見ないでください、SAN値が減ります。

「おにいちゃん…？」

「いや、俺のせいじゃ…」

「お詫びとして…お兄ちゃん？」

「ぐっ……………なんでございましょう？…お嬢様……………」



「妹さん…更生してきて」

「…、無理でございます。お嬢様…もう…」

「やって。」

「はい。」

俺に選択権なんてなかった。ここにもし雪ノ下がいたら『自分のことも更生できて無いのに生意気ね』って罵倒されるんだなあ…

そう、噛みしめつつ、俺はまるで紐なしで100メートル上空からマグマダイブして生き残るくらい高難易度な勝負に出ることにした。

まじで、死ぬかもしれない……

「取り敢えずだ。触らぬ仏に祟りなし。という事で暫く放置して置こう、そうすれ

「ば、」

「お兄ちゃん？」

「はい…」